大正四年九月一日發行大正四年[illegible]
明治卅七年五月七日第三種郵便[illegible]

女子青年界

第十二巻第八・九號

要目

女子青年會第十二巻第八九號

目次

YOUNG WOMEN OF JAPAN

(JOSHI SEINEN KAI)

Volume XII　　September, 1915　　Number 8 & 9

日本基督教女子青年會

目的

日本全國の諸學校及び市邑に於ける青年女子の間に基督教女子青年會を設立し其一致聯合を圖り以て萬國基督教女子青年會と連絡する事

左の事項を奬勵す

青年女子の間に基督教的智識を普及し之を導き基督耶蘇を救主として信奉せしむる事

青年女子の靈的生命を涵養し献身的行爲を勵し其智識社交身體の發達を圖る事

青年女子をして萬國に基督の王國を擴張せしむる事

會友

基督教女子青年會未設の地或は學校に於て本會の主旨を賛助し事業を奬勵せんと欲する者を以て本會の會友とす

會友の種類及會費は左の如し

通常　年　金壹圓　維持　年　金貳圓以上

會友には本會機關雜誌「女子青年界」を送附す

會友たらんと欲する者は本會本部に申出べし

事業一班

巡廻訪問　本會幹事を派遣して支部を奬勵し或は地方の巡廻視察をなさしめ本會の發展を圖る

出張講演　廣く一般女子の需に應じて講師を派遣す

機關雜誌　月刊「女子青年界」を發行し靈性智識の資に供す

紹介部　一般女子のため諸般の紹介をなす

寄宿舍　東京市内に青年女子の爲監督寄宿舍の設備有り將來他の都市にも設立せん事を期す

宿泊所　外國婦人の要求に應じ併て日本の眞相を紹介す

夏季修養會　毎年夏季山水明媚の勝地に開會し專ら女子の修養を圖る

旅行者の友　地方より上京する婦女子の保護を要する者の救濟保護に任ず

社會部　所屬幼稚園有り主として下級社會の幼兒を收容し且其家庭の傳道啓導につとむ

中央委員

委員長　井深花子

副委員長　岡見恵子

記錄書記　三谷民子

會計　井上友子

萬國基督教女子青年會同盟委員

河井道子

委員

津田梅子（東京）

エ、ピ、ウエスト（東京）

鈴木歌子（東京）

小此木松子（東京）

長谷川喜多子（東京）

サラ、エリス（東京）

イ、クレメント（東京）

山田千代子（横濱）

廣岡淺子（大阪）

ケー、トリストラム（大阪）

エム、エフ、デントン（京都）

佐伯小糸（京都）

松田道子（京都）

エス、ソール（神戸）

上代淑子（岡山）

役員

總幹事（本部）　河井道子

同（同）　エ、シー、マクドナルド

書記（同）　アール、レーガン

總幹事（東京）　エム、エル、ヤシウ

特志幹事（同）　エム、ペーヂ

特志幹事（同）　イー、アル、カウフマン

幹事（横濱）　エム、ペーカー

事務員（本部）　河口正子

事務員（東京）　大呑久子

旅行者の友係　林ふさ　松崎滿喜

幼稚園主任保姆　大槻愛子

幼稚園助手　永野睦子

寄宿舍監（第一）　門倉ふじ

寄宿舍監（第二）　大西絹子

宿泊所取締　ミス、ダルトン

東京市牛込區田町三丁目十二番地

日本基督教女子青年會本部

女子青年界　第十二巻第九號（大正四年九月一日發行）

會説

第十回修養會の思出

星野愛子

去る二十一日の夕私共が各異つた希望と期待とを以て修養會を大津に開會致しましてから最早一ヶ月餘となりました、此過ぎし一ヶ月間に私は幾度感謝を以てあの修養會を思ひ出し喜びを以て共に會せし皆様方の事を考へましたでせう。

今年の修養會は色々の方面から有益であつたと私は考へます、第一に今年は河井先生やマグドナルド先生のお留守であつた爲、委員一同は申す迄もなく出席せられたる諸姉が擧つて會の責任を負はれ會の爲に力を併せてお働きになつた事は疑ふ事の出來ない喜ぶべき事であつたと思ひます、未だ年若い姉妹方が喜んで快く進んで會の爲にお盡し下された事を考へますと私共は青年會の前途の爲、又此等諸姉の爲に厚き感謝を捧げざるを得ないのであります。

此貴き一致協力の精神と相伴つて會を有益ならしめたものは確に出席者一同を充した祈禱の精神であると思ひます、祈禱會の盛なる教會は力ある教會だと申されて居りますが今年の修養會では孰れの祈禱會も非常に盛であり、其上祈の靈に充された會でありました、是と申すも今年は殊に私共が力弱き事を

切に感じたる結果であつて『エホバを俟望む者は、新なる力を得ん』との標語を幾分實現し得たものではなかつたかと考へられます。

祈に依つて力附けられ、一致協力の精神に依つて勵まされたる私共が啻に有益なばかりではなく他所にては味ひ難き樂しく聖き相互の交りを結び得た事は確に長く出席者一同の記憶に殘る處と思ひます、協議會に於て多くの青年會支部が各其事業について報告をせられました時吾等は皆神に在りて共に働く者なる事を誠に切實に感じました、そして斯く近けられた私共は仕事に遊戯に打解けて交る事の出來た其樂しさ、私は今も尙思ひ起して感謝を致して居ります。

最後に最も喜ぶ可きは此會が眞の意味に於ける修養會であつた事、即ち今井先生の申されたる如く、自己實現の爲の修養會ではなく、神の御國を擴張せんがための修養會であつた事であります、此事實は會が終りに近づくに從つて次第々々に明に感ぜられて參りました、組會では多くの姉妹方が如何にして此處に受た惠を他の人々に分つべきかにつき、深く考へ且つ祈られました、未だ信仰に入らざる家庭に歸られんとする姉妹方は如何にして其愛する家族に神の道を傳へんかと眞面目に祈り且つ教師方と語られた事でありました、更に會期の半に至つては有志の姉妹方は毎夕會場の附近に群り來る村の子供等の爲に集會を開き、又は舘内の女中等の爲にも特別集會を設けなどして自ら受けた惠を他に分たん事を力められました、此大切なる教訓、即ち私共は單に自己發展の爲のみでなく、神の御用をよりよく務め得る爲に修養すべきであるとの教は確に今年出席せられたる姉妹方の心に深く刻まれたる事と信じ感謝する所であります。

過ぎ去つた修養會の事共を思ひ起すにつけて偲ばるゝは、かの波靜なる濱邊に共に學び共に祈りし諸姉が御上であります、諸姉は各々其立場に從つて神に事へ修養會にて感得せられたる多大の教訓を日常

の生活に實現しつゝ信仰の道に進み居らるゝ事を信じて喜んで居ります、尚、信仰の爲或は其他の理由のために人知れず十字架を負ひ、神の兵士として貴き戰を續けられつゝある姉妹方の爲にも其の前途の御導と將來の祐助が厚く且深からんことを朝夕神に祈るものであります。

第十回夏期修養會を終りて

マシウ

修養會の終りの日即ち二十九日の朝早く出立し樣と思つて私の御部屋の人々は皆五時頃起きて色々用意をして居りました。私もミス、カフマンと一緒に着物やその他を行李の中に詰めて居りましたが、恰度其時十二歲位の汚れた着物を着て古ぼけた帽子をかぶり、目も片方は見えない樣な、みすぼらしい風采の子供が、片手に自分が漁つた魚を三四尾笹の小枝にさして提げながら、銅像の樣に椽側のそばに身動きもせずに衝立つて居りますので、部屋の生徒達が、『何を見に來て居るの、』と尋ねますと、『西洋人を見に來た。』と申しますから、『はじめてですか？。』『ハイ、はじめてです、でも西洋人はこわいよ。』『何故さう思ふの、少しもこわくはありませんよ、私達は一つの御部屋に一緒に居つても何とも思ひませんが、どうして？。』『活動寫眞で西洋人がいろんな惡い事をするのを見たので、さう思ひます。』といふ樣な會話を致したのでありました。

扨今年の修養會に來られた方々は多くは信者の方でありましたが、然し各地の違つた學校から、又それ〴〵違つた生活境遇にある人々で、且其修養會

に參る動機目的等も違つて居ました。例ば或方は支部を代表して、或方は唯面白いから、又は友人が來たから一緒に行くと云つた風の方々も集まつたのであります。けれ共皆基督信者でありますから、基督に就て、又基督敎に就て、神に就て大抵同じ考を持つて居りますが、其毎日の集りに出て、立派な演說を聽いて居る間に、段々私共御互ひに自分の考も自分自身も變化した樣な心地が致し、又皆の顏も變つた樣に思はれました。これは如何なる理由でありませうか、唯皆が一つ所に遊んだり、立派な方々の講演を聽いたり、又好き考を受けたばかりでなく、其處で神に就いて新らしき觀念を得たよりも自分自らが神に接したからであります。例へば若し一人の小さい子供があるとして、この子供が自分の母より離れて親族の家に行つて居つて、長く其母に逢はないならば、必ず眞に自分の母が居るか居ないかを知らず、又或時は親切な愛に充ちた母があれば好いにと思ふであります。然し後になつて何時か實際目前に自分の母に逢ふ事が出來た時には、前の夢の樣な考と違つてどんなに嬉しく愉快に感んずるでありませう。それと同樣に私共人間は常にどうかして精神の親即ち眞の神がほしい、これに接したいと思ふて居るのでありますが、今回の修養會に集つた者は皆此の眞の神があり又其神に親しく接したと云ふ心地が致す樣になりました。若し私共がこの修養會から歸へる時に、唯私共の生涯に就いて、責任に就いて種々の考を持つて歸へるのみであるならば、今後種々の違つた所に行き、違つた境遇に逢ふ時には、斯る考は漸次變化して始めの考は消え去るかも知れません。然し其の新らしい考を與へ給ふた神がありそれに逢つたと云ふ經驗を有して居るならば、何所に參つても、何時までも、其の神の御前に居る故、却つて尙一層高くなり、高尙な理想を立つるに至る事を信ずるのであります。

今一つの事は其の男の子が、私共を見て居る時唯一人で立つて居りました。西洋人は恐しい者だと思

つても尙見たいと思つたので、他の子供から離れて一人で見に來たのでありました。それと同じく私は今回の修養會に參りまして、私共がどうしても神樣に接したいと思ふならば、一人で接しなければならないと云ふ事を知るに至つたのであります。例へば水泳に致しましても。海岸に立つて他の泳いで居る人達を見て居るばかりでは泳ぐ事は出來ません。どうしても自分で海に入つて泳がなければなりません。オートフイツトマンは「他人の代りに成長する事は出來ない」と申して居りますが、私共が修養會に於て共に祈り共に神を讃美し、有益な講演を聞いたからとて、神と私共の個人的關係は結ばれたとは申されません。即ち私共が神を讃めたゝへ、これに從ふか否は私共各々の心の中にある事でなくてはならない事を知るに至りました。隈なく冴え渡つた月の或る夜、方々の部屋々々ではいと面白そうに遊び戯れて居りました。私も自分の部屋の椽側に出て月を見て居りましたが、其時ふと近くの部屋より一人の生徒が出て塀の蔭に跪づき、十分か十五分間一人で祈つて後、友達の居る處に歸へつて行つたのを目擊致しました。私は其の時其の生徒が如何なる事を心に思つて居たかと考へて見ましたが、どうしても眞に何事をも決心するには一人で祈る事が必要であります。

又或人は、自分は以前から信者であるが、然し自分の樣な者は本當に何も出來ない者であると思つて居たでありませう。けれ共今回の修養會で斯くの如く思つて居た人も、他人のためにどうしても何か致さなければならない樣になりましたので、多分何も出來かぬる者であると思つては居たものの、實際にして見れば案外に好結果の收め得られしを經驗して神は如何なる者をも有功に用ひ、何をか爲さしめ給ふ者である事を知り、歸へつて後は必ず親族友人のために傳道し樣と決心の出來た方も多かつたやうで御座います。私共は此の眞の神に接し、自分の眞の性格を知るに至つたのであります。是迄は自分の誠

の力、其弱さ等を知らなかつた人々も、今回の修養會に於て誠の神に接してより自分の眞の價値を知るやうになりました。或有名な人の言葉に「一人が其の人格を知りこれを養ふには神に交はるより他に道なし」と云ふ事がありますが、私共が斯く修養會に於て以前よりも親しく神に交りましたため、此の言葉の眞理なる事を悟りました。

次に眞の神がわかり、これに接して自分の眞の性格及眞價を知るに至りましたが、從つて又自分と他人の關係の大切なる事をも知る事が出來ました。例へば、或る夕夕陽會の時海岸にある大勢の子供が垣根の外に集まつて、私共が庭に出て讃美歌を歌つて居るのを熱心に聞いて居りました。集が終つて後、一人の出席して居られた幼稚園の保姆の方が、その子供を集めて何か敎へたらどうであらうとの、提議を提出されました。よつて其夜を手始めとして、毎晩海岸で幼稚園の保姆や日曜學校敎師其他有志の方々が讃美歌を敎へ、話をして聞かせました。又會場の女中達が、自分達のためにも何かして貰ひ度いと申して參りましたので、其の後彼れ等のためにも集を開き、其結果二人の女中は基督信者になる決心を致しました。

上述の働きの外に、私共は各種々の事を致しました。即ち唱歌隊、販賣部等であります。これ等を致すと同時に、會の好結果を收むるに各責任をもつて居る事を知つたのであります。金森通倫先生の御講演により、日本の今日の社會を救ふには、傳道師や牧師の責任のみならず、私共普通の基督信者の双肩に大いにかゝる處があり、且如何に立派な牧師よりも私共各が親しき友を救ふべき責任を有して居り、又皆が一人づゝを導く時には二十四年間に日本全體の國民を基督信者になし得る事を知つて且驚き且大に奮發せねばならぬことを感じました。

基督敎信者であつても、此の修養會に參る前は種々の經驗、境遇或は失敗等により其心の中にはいろ〳〵の考へが混じて居つたでありませう。或人は

神より餘程離れた心地し、或人は自分は信者なるも何事をもなし得ざる其の無力を嘆じ、又或人は他人を導く責任を餘り感じない人もあったでありませう。然し會の終る迄には皆、この世の中にて最も奇しきものは神である事、私共自らの人格の大切なる事、又他人に對して盡すべき大いなる責任ある事などを的確に知る事が出來たと思ふのであります。要するに私共は今回の修養會により神の眞の生命、他人の靈的生活及自分の靈的生活は目には見えざるもこれが眞の生活なる事を知るに至つたのであります。

神のみやこには　しづかに流るゝ
清きかはありて　み民をうるほす
みことばの水は　つかれを癒して
新たなるいのち　與へてつきせじ

編輯より

▲本誌本號は豫報の如く多部分第十回女子靑年會夏期修養會講演及記事を揭載し、八、九月號合併の心組にて紙數も增加致し、第十回修養會紀念號として發行致し候。

▲内容は專ら講演を主とし、修養會出席諸姉の手に成りし筆記記事等、紙面の許す限り揭載致し候、猶筆記所感等本號に揭ぐる能はざる分は次號に揭げ可申候。講演筆記は其れ〲校閲を經る豫定に候ひしも、或物は校閲を經、或物は講師の原稿を戴き候も編輯時日切迫のため意を果す能はざるもの多かりしは遺憾の極に候。之れ講演諸先生及讀者諸姉に對し御詫び申上候。

▲讀者諸姉は旣に御熟讀になりしならん、アリス、コーマン女史の原著「婦人の典型」の譯者林靜太先生には今回多大の御好意を以て特に該書後半の高譯を寄稿下され候ひしにより、本誌本號より「理想の婦人」と題し引續き揭載致すべく候。本稿は其前半「婦人の典型」と類を同うし、古今の賢婦名媛の事蹟に徵し、男子に及ぼせる婦人の感化と助力を述べたるものにて、而かもその裏面には文學的趣味と宗敎的空氣の交錯流露せるものにて、殊に先生の流暢靈妙なる筆致を以て譯述せられ候へば本誌愛讀者諸姉には特に絶好の讀物なるを信じ申候。

▲本號記載事項は修養會のものに偏したるため、單調に失し體裁其他充分ならず、又豫定欄を省きたるもの御座候、然し亦不得止次第御諒察御宥恕を願上候。

▲炎暑漸く去り活動の好時期と相成り及ばず乍ら本誌使命のある所に奮進仕度希望に御座候まゝ讀者諸兄姉にも以前に增して御援助下され度祈り上げ候。

第十回夏期修養會講演

歡迎の辭

中央委員長　井深花子

私は中央委員の一人として、個人として、諸姉妹を心より歡迎いたし度いので御座います。昨年皆様を御迎へしたのはつひこないだの様に思はれますが、然し又今年のこの會を待つて居れば、待ちどうしく思ふので御座います。新らしい御顏や、永らく逢はなかつた方々に久々で御目にかゝるのは實に嬉しいもので御座います。然し唯御目にかゝるのが嬉しいと云ふ、その様な單純な事でなく、もつと深い意味があります、主に此處に集まつて居られる方は學生でありますが、上級生になれば卒業し、下級生が代りに代表されて御出でになるので、次々に新らしい方々が集まつて御出でになる、それでキリストの教を聽く熱心な方が一年々々に增して行く様に思はれて、嬉しく又心強く思ひます。

誠に嬉しく思ひますと同時に如何なる事が、心に浮かんだかと申しますに、第一に消火器の非常な勢をもつて熾に燃えて居る火を消し盡す、あの強き力が思ひおこされました。皆様が車でがら〳〵と威勢よくいらつしやるのを見て居て、何の關係もない様ですが、私には關係があります。この標語の様に强い婦人が年々にふへて來る様に思はれます。こゝで修養して力づよくなり、世の中に出て行かれるのは丁度消火器の力強き力と同じであります。キリストによりて力強くなり、同じ聖靈の力にみたされて、

皆様が出て行かれる時には、如何なる惡をも消火器の様に消し盡す事が出來るのであります。皆様の二三人でもキリストの心をもつて心として出て行けばこの厭しき世の中に於ても、その厭しさを消し得るものであります。

前に申しました様に、新らしい方々に多く逢つて嬉しいと云ふのみでなく、キリストによりて強くなつた婦人がこれまでよりも一層强い婦人になつて、世の中に出られる事を感じますので、嬉しく思はれるのであります。昨年は二十八の學校を代表してをりましたが、今年は三十七の學校、二つの寄宿舍を代表し、その他病院より或は個人の方々が集まつて居られる事を思ひ、非常に嬉しく思ひます。會のために色々準備された委員諸姉もさぞ嬉しい事と思ひます。

諸姉妹が海水浴も出來、體も丈夫になつて嬉しいと云ふのでなく、これも嬉しい事でありますが尙聖靈にみたされ、唯一つの實でなく六十倍、百倍して一生榮かへゆく實をもつて御出でになる事を、御願ひ致し度いので御座います。先程も星野先生の御祈禱の中にもあつた様に、マクドナルド先生も河井先生も御留守で御座います故、何となく心さびしく思ふのでありますが、なほこの方々と同じ様な經驗ある西洋の方、その他委員の方々が色々準備をされて居りますから大丈夫と思ひます、尙ほ諸姉妹も御手傳ひをし、助ける御積りであつて欲しいので御座います。從來婦人會や同窓會などでも人にもてなされ様とのみ思つて參りますので、知つた御友達がなかつたり、もてなされ方が足りない時には、不滿なく思ふのでありますが、是はやめて自分が行つて人をもてなしてやると云ふ風に致し度いと思ひます。又此處に集まつて居られる學校からでも、ある學校からは大勢で、ある學校からは少ないのでありますが、諸姉妹が自分の學校の方々とのみ、親しくするのは何時でも出來る事でありますから、その代りに他の學校の新らしい人々に接して親しみ、待遇して樂し

くさせる様にして戴き度いので御座います。これは新しい方が多く御見へになつて居られますので申して置きます。

今一つ申上げて置き度い事は、皆様の寄宿舎と違ひ、この様な處では部屋により好いのと悪るいのとがあります、ある御部屋は風通しもよく、ある御部屋は悪るいので御座います、キャンプなどは尙暑いのでありますが、悪い御部屋に當つた方は、他の方々が涼しく心地よくして居られるからと思つて、辛抱して戴き度いと思ひます。

諸姉妹もこの會が有益に終るやうに御祈り下さいませ、河井先生もマクドナルド先生も遠き米國より祈して御出でになるだらうと思ひます。一言歡迎の辭に代へて御挨拶申上げます。

信仰生活に於ける軍國主義

今井壽道

聖句引照　エペソ書六章十節以下

聖書の中で此の題の意味のある處は、エペソ書六章の十節以下であつて、殊にこの十節と十二節とをさかさまに、『我儕は血肉と戰ふに非ず、政また權威また斯世の幽暗を宰どる者また、天の處にある惡の靈と戰ふなり。我兄弟よ主および其大なる力に賴りて剛健なるべし』と續けて讀めば好く其の意味が明瞭になります。今年も此處に諸姉妹が修養會を開き今日まで美しき集りを續けられ、又この後二三日間續けて、色々の方面に神の御惠を得らるゝ事を信じて喜ばしく思ふて居ります、が此際皆様に考て戴きたい事は、何故に基督教信者が修養をするか、其の目的は何であるかと云ふ事であります。

一體修養と云ふ言葉は日本獨特のものの樣である

於て、兎も角何か強いものを入れて養い強くする事、完全にする事であります。何が目當でそれを修養するか、斯樣な問題を出す事は愚かに感じられるかも知れぬが、近頃男女青年の性行を考へて、大いに大切と思ふ。女子に就きては餘り知りませんが、然しまづ間違ひはなからうと思ひますが、著しい事は青年の間に一種の厭世思想が滿ちかけて來た事であります、此間特別に驚いた事は、武州御嶽で一名の學生が見事自殺をして居つた、と云ふ記事でありましたが、其學生の前に自殺者の日記と云ふ長田某と云ふ文學者の作の、終りの頁を開いて居つたさうである、其の著者は後に其の日記に對する感想を書いて居るが、私は好く氣を付けて讀んで見たが、これが自殺の主なる原因をなして居た事が判つた。社會教育に於ける此の文藝と青年の厭世思想には、私のみならず、教育宗教に干與る者の皆注意を引いて居る事である。今の文藝は青年に惡しき思想を影響し厭世の思想を與へて居る。文藝のみならず今の世は惡しき分子が充ちて居る。何處に有るかと云へば、人生と云ふものを自分の立場からのみ見て居る處にある。文藝も倫理學者も同じ事を示して居る、即ち自己の立場を明らかにするには何れも同じで、倫理學者は文藝家を責めて居るが、どちらにも好く自己實現を元として考へて居る同一の思想はこの結果を來たす。そこで何故に修養が必要であるか、修養は自己實現のためとするならば、それは基督教信者ではない、かゝる考へで修養するならば、それは無效である。其代りに何を考へ、何を出發點到着點とするか、私は軍國主義と答へたい、これは穩かならぬ言葉であつて、今獨逸はこれを惡しき方に用ひて居つて、大いに打ち壞すべきでありますが、私が今云つた意味は精神的に取つて欲しい。これは自己の目的を、自己を國家に捧げる事とし、自己を現はすにあらず、もつと大きいものを現はさなければならない、自己は大きいものの一部である、其大きいものを現はす爲に自己をあらはす、これが修養の根底で

ある、これが眞の基督信者の修養である。獨逸は强い、憎らしいが實に强い、其强い原因は獨逸の軍國主義にある。其機械も智識も修養も凡てを此主義に打ち込みし長き間の準備によるのであつて、これは大いに學ぶべき處であります。

ボーロは『我儕は血肉と戰ふにあらず、政また權威、また斯の世の幽暗を宰どる者、又天の處にある惡の靈と戰ふなり』と云つて居ります。これは靈的政治と云ふ意味であります。即ち私共の軍國主義は非常に大きな戰線があつて、其處で神の國と惡魔の國とが戰ひをすると考へ、自分は神の國を支へ助ける爲に立つのであるとの考を持ち、これを私共の目的とし、修養はこの事より割出せしものでなければならぬ、今日の基督敎信者は現代の思潮に動かされ學者が自己實現と云へば、自分も自己實現、人格と云へば人格と云ふのが普通であるが、宜しく自分は基督敎信者の青年であると云ふ其の違ひを自覺し、自分は神の國の戰線に立つて居るもので、神の國が敗れるか否かと云ふ、利害關係にあづかるものであるとの感じをもつて修養しなければ役に立たぬ、神は創世記に『生よ繁殖よ地に滿盈よ、之れを服從せよ』と云つてお出でになりますが、この服從せよと云ふ事は、今の基督敎の言葉で云ひ換ゆれば、世界を變へる事が出來る、即ち御國を來たらせ給へと云ふ事は實現されつゝある、二つの事をもつて、服從しめて居る、其一つは知的である、これは大分服從させて居る。他は宗敎である、これは基督敎がなすべきである。科學と宗敎とは揃つて行くべきであるけれど、少し違ふ處がある、科學では其働きをする原を考へて、それが何であるかを知ればよい、例へば電氣をもつて、これが何より起るかを知れば、これを種々に應用し服從せしめる事が出來る、然し宗敎的はさうは行かない。この世界は如何になるべきか、これが私共の前にある考ふべき事で、こゝに違ひがあつて科學者とはこの點にて異つて居る。これと戰ふために軍國主義が必要である。こゝに一つ

のダイナマイトがあるとして、これが爆發する事は科學上で判然して居る。いつも爆發するが、其の後には何があるか、輕い意味からは、人の不注意がある、深く云へば人をころす、敵を殺すためと云ふ意志がある、其の意志を征服せねばならぬ。軍國主義の原は物の後にかくれて働いてをる。

　天國と惡魔の戰ひは、其の天國の子供等に一人々々の忠實なる兵士になるやうに要求して居る。私共が一人修養して、自分ばかり偉らくなつても、一度石鹼玉の大きく膨れたのを、小さく膨れた小供に威張る子供の樣であります。大きく膨れても飛び去つて直ぐに消えてしまいます。私共のみならば、偉くならうが、立派に高くならうが、五十歩百歩であります。であるが何故私一人でも大切であるか、何故力強くなければならないか、これは一人でも弱ければ大なる缺陷を生ずるからである。ナポレオンの傳記を讀んで見ると其の中に、或る夜一人の歩哨が眠つて居るのを見て、自分がその代りに立ち、歩哨をしたと云ふ事が見へて居るが、全軍を指揮し併呑せしナポレオンは私共の考へられない事を考へた偉い人である。某少將がかの青島陷落の原因の主なるものは、ある夜日本の決死隊が陣地に近づきし時、一人の歩哨が逃げたためであると云つて居られます。一人の兵士の强弱は全軍の勝敗に關係するものであります。神の國に於ける兵士でも又同一で、一人の人が働くと働かないのが全軍に影響し、全戰線に關係する事を考へねばなりません。

　使徒行傳十三章の二節と三節に、アンテオケより送り出されたバルナバとポーロの話が書いてあるがこゝにある三つの言葉を取り度い。第一撰び別つ、第二命ぜし處、實は召して命じた其の命令、第三行かしむ、遣はしむと同じ意味である。これは撰び別たれ遣はされたるポーロが遣はされて萬國の傳道に赴きました時の言葉である。ポーロのみならず、天國の戰線に於て私共皆に來る處の事である。私共は命令を受け撰ばれ遣はされたものである。自分が命

ぜられ派遣せられた事を、全うするために、力が入用である、これが修養の目的となるべきであります。私共が一人働いても働かなくとも、世界を征服して、新らしき世界を立てる處が出來る樣に思はれるが、神は私共に特に要求なし給ふので、遣はされた其目的のために、神の力が私共に與へられるのであつて、自分が偉くなり高くなつて自己を實現するために力が與へられると思へば、間違ひであります神が先に立ち給ふ戰線に共に進むために、惠を下さると云ふ信仰を有すべきであります。

次は捧げる犧牲心、これは軍國主義を十分に、實現するために、何れの國に於ても必要である。まして神の國に殉する精神がなければ、信仰は駄目である、どうかこれを受け度い、この心を有し度いがため力を貰ひて修養をする。

強くなるに二つの方法がある。一つは主によりて剛健くなり、他の方は主の大いなる力によりて強くなる、主の大なる力とは、エペソ書を見れば、死に勝てる力、其勝利を得し力によりて、強しとある。最後の死に打ちかつ力によりて強くなる、これは犧牲心である。神の國のため自分の一命を捨てる事は勿論犧牲であるが、迫害のない時にもなほこの精神が行なはれねばならぬ。この死は私共が一番大切だと思ふものを捨てる事が、天國のための死であります。一度死んで生きて居るポーロが前に大事だと思へるものをすてし時死し、その代りに基督にあつて生きて居る。誰にでも主はその力を與へ給ふ前に、かゝる事を要求し給ふ、さうでなければ力は得られない。ヤコブが兄のエソウと仲惡しくなり逃げた時エソウに勝つ樣にと夜中祈つて居た處が、一人の人が出て來て終夜相撲をとつて居たが、其の內、夜があけて、兄と逢ふとする時跛になつて、逃げる事も戰ふことも出來なくなつて居ました。この時に神の祝福があつた。最早やヤコブには絶對絶命の時、エフウは戰かうなどはさて置き、女の如くその心を和げ、ヤコブの頸をだいて泣いたと、聖書に書いてあ

ります。これは私共に取つて大切な事である、私共が何もなす事が出來ず、絶對絶命の時、神のめぐみがあつて、力により強くなる事が出來ます。ゴールドンの作物の内にマギーと云ふ一人の跛にて貧乏な女が教會に居りました、教會員はこれを見て不憫に思ひ、皆出しあはせて、撞木杖を買つて與へましたマギーは非常に喜んで、これを持ち教會に參つてをりましたが、或る日一人の牧師が頼まれて傳道說教をなし、寄附金を募つたが、最も教會で金滿家である銀行員は說教中欠伸をし、次に金持ちの商人は時計のみを出して見て居たので、之を見た牧師は大いに失敗したと思ひ失望したが、說教が終り祈をしたやがて、教會の委員が盆か何かを廻して献金を集めた、然しそれは唯僅ばかりであつた。マギーは何か上げ度いと思つたが、何もない、それで考へて居る内に『汝の大切なるものを與へよ』と云ふ聲をきいたのでマギーは自分の最も大切な撞木杖を揃へて盆の上にのせた、委員はこれをもつて祭壇の方に行からとすると、金滿家はこれを見て恥ち入り、委員をよびとめ名刺を出して多額の金高をかいて渡したと云ふ話があるが、マギーのこの世の中を歩くに最もなくてならぬ杖を捧げたるは非常な力があつた、この力、この覺悟が私共に必要である。

　神の國を擴張し、世の中を征服する、これが修養の目的である、基督信者の眞の目的ではないか、こゝに於て厭世などと云ふ心は起さず、何一つなく貧しき不幸な境遇にあつても、強くなり鷲の如く疲れず、その時耳にきくものは『我めぐみ汝に足れり』と云ふ神の御聲であります。

われ迅速に來らん爾が有つ所のものを堅く保
ちて爾の冕を人に奪はるゝことなかれ
勝を得るものをば我神の殿の内の柱となさん
此より再び出ることなし
（默示錄第三章十一、十二節）

祈禱の性質と價値

星野光多

こちらの夏季の修養會に來るやうにとの事なりし故、演題を伺つた處が、今度の標語に因みし事にして欲しいとの事でしたから、この題をえらんだのであります、この中には祈禱と云ふ言葉はないのですが、『エホバを待ち望む者』こゝに信仰と祈禱がこもつてをります、又エペソの方も、どうして神の大なる力をわれ〱の身にえらるゝか、即ち依る賴ると云ふのは信仰と祈禱である、祈禱と云ふ文字は共にかゝげてはないが、其の中に含まれてをる。そしてこの問題をはなす事が標語に適當してをる事を信ずる故、差し上げたのであります。

惠の手だて、Weansot grace とは神の惠と力を得る手段である、惠と力はみちあふれて居る、同時にこの惠を我がものにする道は備つて居らねばならぬ其道にも色々あるが、聖書も、敎會も、日曜日もその一つである、然し第一の手だては、祈である、四十里五十里の遠方の山川から、引いて來た電氣は、東京に大きな活動をなし、物を動かして世界を輝してをる、これは其手だてによる、これらより考へて宗敎は祈禱である、祈禱よりはなれては宗敎は無意味である、祈禱を無用とする人に二種ある、一つは無神論者、即唯物論者萬事萬端が物質の中にふくまれてをるから祈りはいらぬと云ふ輩である、無神論者なればあたりまへであるが、今一つのものは有神論者で天地萬有は神より出づと信じ疑はないが、祈禱を必要と認めない、何故かと云へば神は萬事萬端行きとゞいて居給ふ、又聖書にある如く私共が何も祈らぬ先きに必要なるものを有し、これを知り給ふ

故、唯神のなさるにまかせてさへ居れば好い、所謂『心だに誠の道にかなひなば、祈らずとても神や守らん』と云つた樣な風の者である。この種の者はクリスチヤンに多い、神は何物をも知り給ふが故にこちらから註文だてをしないでもい丶、萬事を知り給ふ故此事、彼事と特別にとりたて丶云ふことは無用である、斯くするは却て神の計畫に邪魔をするので失禮である。それ故何でも神のなし給ふ事にたゞ感謝してさへ居れば好い、と云ふのでこれは信者の立塲から考へ得らる丶事である、か丶る人は祈禱をしない、さればとて全く無神論者ではない吾々も兎もすればこの種の者になり易い、實質に於ては性質を非常に異にせるに拘らず、實際は同じ事になる。

一體祈禱は人間の天性より出てをることでこれは古き説なるも有力である、人間の天性に發する事であるから人間として其天性を全うするに缺くべからざるもの、人間が己れを磨き立て丶完備ならしむるには、祈禱による處がある、人間が世界にあつて其天命を全うするには祈禱による、天性が祈禱に基いて居る故、人が人として其天職を全ふするには祈禱によるべきである。古今東西地球上に住める諸人種の間に祈禱は彼等の共通的特色である、又個人としても、一社會としても、人として社會として祈禱をつとめる處は發達し、又事業をしても必ず成功してをる、又人として、善人として尊敬するに足る人は皆祈禱の人である、古來神を信じ祈を力めし人である、斯く考へれば祈禱は天性に基きそれに從ふ事にて、これは迷信でも野蠻時代の遺物でもない、天性なりと斷論を下す事が出來る、然しか丶る事に同意しない人がある、傳説より來た迷信で、神なり佛なりを立て丶心を結び付ける事である故、客觀的では惠を得られぬかもしれないが、主觀的に功力を得て居ると云ふ説があるが、これは强い説ではない祈禱は人間の天性に出づるものであつて、性格の發達に對し又其使命を果すために必要であると云ふ强い確信をもたせるには、先の祈禱天性論と云ふ證文

に裏がきが入用である、自分の捺印のみにても好いが、或人はこの手形をとる事を嫌やがる人がある、由つて裏書が必要であるが、この裏書の一つは祈禱の理由である。これが哲理は別として祈禱と云ふ事が實際人間の理性ある頭に成程と云ふ感じを與へる丈道理の積んだものであらうかを示すのである天地萬有を治め給ふ神の御政治上に、祈は功力を有するか、神は法則をもつて天地萬物を支配し治められ、如何なる小さい事の中にも物理の法則がある。それでは小さい人間が小さい利害により、神に願ひて何の功力があるか、神の政治の中に祈禱を入れる餘地はない筈だと、これは難しい問題である。ルカ傳十一章の一節より十三節までの間にイエスが祈を弟子に奬勵せられた記事がある、この記事は人間社會の事で、人間社會に於て求むると云ふ事が、與へる事を惹起し、尋ぬる事が逢ふ事を惹起し、門を叩く事が開く事を惹起す。この三つの事が書いてるが、是が人間社會に行なはれないとすれば、人間社會の美しさや、優しき處が半ば削がれて動物社會の如くになる。若し米國に行つて大統領に逢ふ事はむづかしいが、誰かの紹介狀を有するか、白館の門前に行きて名刺を出し、是非逢ふと云ふ心があれば逢ふ事が出來る。又始めより面會出來ないと云つて熱心がなければ逢はれない、智も名譽も皆求むれば得らるゝ者で、皆さんがかうして居らるゝも求められし故である、尚もつと求むればもつと得られる。さればこれが爲人間社會は亂るゝかと云ふに、然らず、却て秩序整然として來る。之をイエスが教へられたのである。尋ねるから逢ひ、求めるから與へると云ふ事が人間社會にさへあるものを、まして叩けば神が明けて入れて下さらぬ事があらうか、求むれば與へらるゝは人間さへこれをせねば、其品性下落して機械的となる、豈や神においてをやである。

宇宙には自然法がある、これを以て神が治めて居らるゝが、これは鐵條網の樣なものではない、人間を迎へるためでなく、神が習慣的に、之を用ひて治

めて居給ふのであつて、人間を入れぬ不自由なものではない。皆様の内に通學をする方があるでせうが毎日同じ道を、同時刻に行きますが、車や電車の様ではない、他の道からでも好い、一定の道の外は行けないときまつた譯ではない。廻り道を仕様と思へば出來ます。之れと同じく神の自然法も習慣的に支配せらるゝのであつて、これは神の自由になし得給ふ處のものである。若しさうでなければ神も人も法の奴隷である。時に神が法以上にある事をなし給ふ事がある、これは奇蹟で復活等はこの一例である。又時としては法則をかへずになし給ふ事がある。例へば人間界に官制と云ふものがあつて官吏の俸給は皆定まつて居るから、それより多く出す事は出來ないが、若し天皇陛下が御手許金を御下賜になれば、官吏の俸給を多く増しても好い、是もいけない不都合であると云ふ事はない。水道の水は定まつて居るが、別に水道に水を入れ換へないでも、パイプを換へないでも火事などの場合には水を増す事が出來る自然法に何の抵觸もなくて神は我等の祈禱を聞き給ふ。又或る時は自然法を支配して、これを曲げて祈をきゝ吾々を惠み給ふ事がある、これ舊新約に多く見る處であります、恰かも天皇陛下が特赦令を布き給ふ時罪人が赦されると同じで、國君たるものはこれ位の權力はあるべきであります。

豫定說とて神は世の始めから亡ぼすか救ふかを豫め定めて居らるゝ故、祈りても亡ぼさるべきものは亡ぼされ、祈らずとても救はれる者は救はれると云ふ說を唱ふる者があるが、これも皮相の觀察に過ぎぬ、神には時間の關係なく何時も見て居給ふて始めより救ふ様に定めて下さるのであります、恰度召使を使つてをる主婦が本人は少しも知らないが、盆の心付のため前以つて與へる物を買つて置く様な者で主婦にはそれ丈の目がある、されば神はまして吾々の信を知り給ふ、前以て惠を與へ給ふが故に祈れば即ち求むれば、尙以上に惠を下し給ふ事が明かである、祈禱は神の政治を邪魔するものではない、神は

この祈禱を一つの條件として、其功力を受け入れ、叩けば開けると云ふ仕組で治め給ふのであります。

他の裏書人は祈禱應驗の事實であります、人は理屈のみでは滿足せず、理屈では兜を脫いでも、眞に行に事實に表はれねば納得しない。依つて事實より祈禱の聽かれたと云ふ事を學びたい。必ずしも奇蹟として見ないでも、祈の應現があつた事實を示す事が出來ます。この祈の應驗に就いて割合に易く信じらるゝ事と難きこととがある。精神的の事は信じ易い。例へば人のために祈りて酷惡非道であつた者が、神を求め悔改めて善人になつたと云ふ樣な事は信じ易いのであります、又品格の上にも祈禱の表現を見るが、これは道德上からも信じ難き事ではないキリストが三人の弟子を伴つて山上に祈れる時、其容貌が變つたと、これ品格に表はれたのを示して居る。修養は品格を高め、心に餘裕を與へ、信仰をまさしめ、罪を知らしめ悔ゆる樣にさせるものであつて、靈魂が生れ變る事を、基督信者たる者は大抵信じて祈つて居る。然し時に祈れる祈禱の應驗として信じ難きは物質的の事である、生活に困つて祈つて神より金を貰ふ等の事は有り得ない事である、又病氣の時祈禱によつて、病氣がなほされると云ふはずはないと云ふ人が多くあるが、然し事實病人も治つて居る、後世の人には適用されぬとは何處にも書いてない、困つて居る時助けられ、病の時癒されると云ふ信仰なくて祈るとすれば、實に物足りない感がします、精神界のみならず、物質界にても神が祈りをきゝ給ふ事を信じずには居られない。聖書に由つても、その他多くの實例によつても明かである。

其實例の一つとして、アメリカにワシントン、オルストンと云ふ人があつた、美術家で諸方を漫遊した人であるが、彼れが英國に居つた時、誰も彼れの作を認めてくれる者なく、日々窮境に陷り、或る日切羽詰つて、自分の室に入り唯祈つた『唯パンと水とを下さい』と熱心に祈り終らぬに一人の戸を叩く者がある、開けて見れば一人の立派な紳士であつた

其人が云ふのに『ローヤルアキヤデミーに出て居たあのエンゼルウリエルと云ふ書題の畫があれば拜見したい』とこれを聞いた彼れは『あれは隨分丹精して書いたものですが誰も賞翫してくれないので、もう仕舞込んでありますが、御覽に入れませう』と埃にまみれた一枚の畫を出して紳士に見せました、紳士はこれを見て居ましたが『幾らならば賣つて下さるか』といふ、オルストンは答へて『今申した通りの畫でありますから、幾何でも宜しい別に望はありません』、と申しました。紳士はそれでは四百ポンド（殆ど四千圓）で讓つて戴きませう』と云つて四百ポンドを置き其繪をもつて歸へりました。後に聞けばそれはスタッホードの公爵であつたさうであります。彼れは客を送り出してから、神が祈に應へ給ひしを心から感謝したと云ふ事であります。

又一人の米國人で年老いた婦人がありましたが、其財産を親族友人間で困つて居る人に分ち與ふる樣に其の姓名と其の額を遺言狀に書入れて置きました二三年の内にこの婦人は死去したので、其遺族の者が遺言狀に從つて、それ〳〵に分ちましたが、その中にある一人の婦人に五百弗を與ふるやうにと、あるのですが、其婦人の住所不明でいろ〳〵取調べた結果オレゴンかカリフォルニヤに居ると云ふ事が判つたので、其方に送りましたが、矢張り戻つて來ました。其中にオハヨー州の何處かに居ると云ふことが判つたので其方に廻送しました、丁度其時ワシントン州の中央郵便局から來た、符箋を幾枚も張つた一通の手紙が、ある家に參りました。後其家より轉狀が先の遺族にあてゝ來たのでありますが、其内に去る金曜日財政上の窮境に陷り、非常に困つたので詮方盡きて土曜日中、唯神に祈つて居た。夜も寐むられないので矢張り祈つて居た處が、神が必ずわれ〳〵を助け給ふと云ふ強い信仰が不思議に出來て、大いに安心し晴天白日の心となつた、處がその翌日あなたから、爲替がきたので、神が吾々の祈に應へ給ふるを今更乍感謝しました。『汝祈らざる先に神は

なくてならぬものを與へ給ふ」と云ふ事がありますが、若しこれが一年前であつたならば、これ程嬉しくはなかつたであらうと、書いてきたさうであります。

ジョージ、ミユーレルは、四十一年間の經驗を過ぎて、神は信じて疑ふ事なきものは必ずこれを捨て給はずと云ふ事を信じ、六十六萬五千ポンドを支拂つたと云ふ事で、孤兒をあたへられしは、神はなくてならぬものを皆に知らしめるためであると云つてをります。家庭では子供や年寄りがあればなか〱暮し難いと云ひますが、幾千人の孤兒を養ひ育てし、ミユーレルは何の心配をも要しなかつた。

仕事嫌いの惰け者が早呑込みは好くないが、我々が正直に忠實に働いて祈る時は、神これに必ず應へ給ふものであります。

次に病氣は神に祈ればとて癒さるゝ者ではないと除外視するは好くない事である、精神的に慰める事が出來ると同じく、肉體の病氣に於ても然うである。

ルーテルが其片腕、半身であるヒリップ、メランクソンが肺病に罹れる時、ルーテルが其病褥によつて見れば最早や氣息喘々として、「さはる勿れ、吾をして安かに行かしめよ」とメランクソンが云ふのを遮り、ルーテルは其枕頭に祈りました、祈つた後も、煩はす勿れ我れをして安かに去らしめよ。と申しましたが、ルーテルはそれではいかぬとて、スープを呑ませ、呑まなければ破門すると云つた、メランクソンは何故そんなに苦しめるかと云つたが遂に一椀のスープをのませ、勝利者の如くなつて歸へり妻にメランクソンは生きると云ひました。果して幾程もなくメランクソンは全快したのであります。

メソジスト派にシンプソン大監督と云はれた人が病氣にかゝれる時、ある處で開かれて居つた年會の席上に監督の病氣であると云ふ事が通知せられし時直ちに其會は祈禱會となり、一同監督のために祈りました、其時一人の牧師が確かに監督の病氣は治ると信じたと云ひました。すると皆もさう思つたと申

しました、後この牧師が監督に逢ひし時、その年會のありし時日などを委しく記した手帖を出して見せましたが、丁度監督の病氣が僧院にきこへて後、醫者がきて驚き如何にして斯くよくなつたかと怪しみし程であつたとの事でありました。

前の筆法で組織的に云つて見度い。丁度ミユーレルが四十一年間一本槍で孤兒を養つた樣に、ドロシヤツルーヲルは母より信仰を受續ぎ、友人間に病人がある時、又は召使ひに病人のある時などは、祈つてそれをなほす事が大變上手であつた。一日貴婦人が來て病院にしたらどうかと云つたが、これを拒んだ。その內色々の病人が來て、皆癒されて歸へりました、依て醫者は苦情を申込み、遂には裁判所警察の手が廻り、これを止める樣に强られましたが、矢張り病人は大勢來るので、來れば拒みえず祈つて癒しました。遂に同情者も出でて、高等法院で勝利を得、後これは病院の樣になりました。

神は凡ての事に於て、吾々の祈を聞き給ふの自由を有せらるゝのであります、祈禱をせずして困つて居る者は、寶の山に入つて手を空しくして歸へるに同じく、又自分の屋敷に金山あるに、これを知らず貧しきに居る百姓と云つた樣な者であります。手を拱ぬいて居るのでなく、この祈禱によりて信仰を有すれば、大いなる力によりて鷲の如く强くなる、又學問なくとも偉らく、何も有せずとも金持ちである依りてこれは一つの特權で、自分のみならず家族友人凡ての者又國家にも祝福ある特權であります。

人事に二つの事がある、一つは友人が旅から來たが物がない、このない事を知るが大切である、他はないから仕方がないと云つて斷つて其儘床にねかすか、さうでない、隣家を起してから來るのでなければならぬ。『何にても願ひ求めよ』とキリストは敎へて居られる。他の奬勵は十二節以下で世間の友人の關係のみならず、親は其子に求むるものより尙よきものを與へる、まして神はよきものを與へたもうものである、これ聖靈であつて主の祈は祈禱の模範で

又凡ての要素を含んで居ります。『御名をあがめさせ給へ』これが凡ての祈禱の基礎となるべきもので唯自分の事のみならず、神の榮光のために祈る事が必要である。

尚終りに、祈禱に必要なる條件と聖句とを御參考に申して置きます。

(一)甲、正當なる態度、神の力を信ずる事、

馬可傳十一章二十二節より二十三節

ベブル書十一章六節

乙、人事を盡す事

ヨハネ傳三章二十一節より二十二節

(二)正當なる動機

ヤコブ書四章の三節

我弱き時に強し

石原 謙

『我弱き時に強し』といふのは云ふ迄もなく使徒パウロの言葉であります。私は此題を今回の修養會の標語に因んで撰み、此題下にパウロの性格及び其信仰の一端を御話したいと思ひます。殊に此句の記されてある哥林多後書十一及び十二章に就て、其中から學びたいのであります。

パウロは多くの敵を持つて居ました。猶太人の間にも異敎徒の間にもあつた許りでなく、同じ基督を信ずる者の間にも彼の功名を嫉み彼の性格を傷けやうとする者がありました。ピリピ書には『猜忌と分爭によりて基督を宣る者あり』と書いて居るのは其を暗示して居ります。彼はかく内外に種々多くの敵

を受け之と戰ひつゝ傳道をしたので、決して靜かに獨りで平和の裏に傳道した人ではなかつたのです。彼には常に戰ひと爭ひと競爭とがありました。彼には基督者としての生活が一の戰ひでした。彼は其間に立つて最後の目的を望みつゝ脇目もふらずに馳場を走つたのであります。彼の書翰の中から此等の語に關した句を拾ひ集めるならば如何に多からうかと思はれます。其處からして彼は實に熱心溢るゝ許りの人であつたことが想像せられます。彼は實に人一倍の熱心を以て人生の戰を續けて來ました。彼は若い時には猶太教を信じて非常に熱心であり、其餘り基督の十字架を說く者を憎みて默視することが出來ず人に先き立つて基督者を迫害しました。彼は自ら『わが曩にユダヤ教にありし時行ひたることを汝等聞けり即ち甚しく神の教會を窘め且つ之を滅せり、我また心を人よりも先祖等の遺傳に熱しユダヤ教にありては我が國人のうち年相若多くの人に超りたり』とガラテア書一章に書いて居ります。かく熱烈な彼は一度自分の方向の誤てるを悟つては飜然として改まり、後半生を基督教の傳道に捧げ、此道に於て又何人にも劣らない働をなしたのであります。かゝる熱烈なる者は、强く猛くはあるが溫厚寬仁であることは困難であります。實際パウロは穩かな人ではなかつたらしいのです。彼は神に對してはあらゆるものを捧げ生命をも惜まなかつた丈に、敵に對しては之を攻むるに急であつた。人々が惡魔の奴隸となりて正しき道を離れ去るを見ては、彼は之を憐れむと共に怒の焰の燃ゆるのを抑へることは出來なかつた。己に敵する者の罪を責めるに躊躇せず、之を碎かでは止まない程であつた。ガラテア書は如何に彼が律法を奉ずる者に對して抱いた怒の烈しかつたかを示して居ります。彼は書翰の初めに、己の傳へたると異なれる福音を傳へし者の咀はれんことを祈り、更に彼等を僞の使徒と呼んで居ます。彼はかく嚴格に且つ峻酷であつたのです。然し此處で注意せねばならぬのは、此一方面のみを見て我々は直ちに

パウロを、愼しみのない唯だ怒り易い人とのみ解してはならぬことです。彼の怒は自分の感情のみから來た、自己を中心とした怒ではなく神を愛する熱心の餘りの怒でありました。眞理に對する熱心が生んだ、罪を憎む咀呪と憎惡とであつたのでした。

　何れにしてもパウロには其處から自我の念が强からざるを得ませんでした。自分は人に劣る者ではない、自分には人の持たない優つた所がある、自分は戰場に於ける勝利者であつて、從つて勝利者としての權利もあるべきであるとの自覺がありました。彼は其生涯を顧みて既に信仰の善き戰ひを戰ふた者との輝いた回想に耽り之を神に感謝することが出來たと共に、又彼の傳へた敎が眞に神から與へられた美しい眞理であつて、此は神の前に誇となすべきものであるとの自信もありました。ガラテア書は又此點でも彼の强い自信を示して居ります。彼は其發端に自己が人から撰まれて又人の力によりて使徒とせられたのでなく、基督によりて立てられたのであるとのことを記して、使徒としての權利を主張し、繼いて我が傳ふる福音が神の默示に據つて居るので、よし他の使徒のと異なる所があつても自分のに誤はない筈であると說いて居ります。一體に彼には神の特別の撰みによりて福音の尊い事業をなしつゝあるのであるとの自信が强かつたのであります。其處に彼の誇、彼の名譽心があつた、彼は神の前に出ては如何にも力弱い罪深い、取るに足らぬ者との自覺がありました。ロマ書七章には罪の力の强くして之が爲めに常に制せられて居る悲しさを恐ろしい迄に描き出して居ります。コリント前書十五章九節には「使徒と稱ふるに足らざる者にして使徒の中に至微者なれば也」と記し、コリント後書十二章十一節には「我は取るに足らざる者なり」(英譯には我はNothingなれど」とありて原文の意をよくあらはせり參照すべし)と書いて居ります。ガラテア書二章二十節には「我生くるに非ず、基督我にありて生くる也」とあり、自分の生命すら自分のではない意味を示して

居ります。併しかゝる謙遜な思と共に、他面には又前に擧げた樣な强い自我の念があつたのです。そして此兩者は一見矛盾して居る樣ではあるが、彼の樣な性格の人にはあり得ないことではないのです。神に對して謙遜なるに從つて益々自己に確信が生じ、之を强く維持して働かなくなるといふのは宗教心理の上から云ふても理解されることであります。パウロは其種の人の最も著しい例でありました。

私は主題に返つてコリント後書十一二章を見ませう。パウロにかゝる性格と信仰とのあつたことを知つて此等の章を讀むと、新しい感興を以て其中にある精神に觸れることが出來るやうに思はれます。彼は非常な自信と誇とを以て第十一章を書き起して居ります。己れの『何事に於ても最も大なる使徒等に亞ざる』こと、己れの敎へたる福音の正しきこと、己れの知識の優れることを主張し、更に己れの爲せし仕事の如何に感謝さるべきものなるかを要求し、其れから十六節以下に己が過去の經歷を顧みて其功業を誇つて居ります。彼は自ら之を愚と言ふてますが、其愚を彼は犯さゞるを得なんだのであります。此を普通に考へるならば餘りに狂人じみた手紙と言はねばなりますまい。併し其處にパウロの僞らざる性格があらはれて居るのであります。パウロは此等の誇を說いて居るが、其が凡て基督に於ける熱心と主張とであつた。そこで彼が誇の中の誇として自ら賴み得るものに說き及んだ時に、彼は自己の力の最もあらはれて居ないもの、己の最も弱い點に其を見出さゞるを得なかつたのであります。何故なれば彼の如くに神に於て誇らんとする者は、神の力が最も多く實現せられん爲めに自己の力の最も弱い部分を誇らなければならないからであります、彼は自分の苦痛多き如何にも人の眼には弱かつた生涯に大なる誇を見出し、そして『我必ず誇るべくば我が弱きを誇るべし』と云ふたのであります。彼の感情は、此書翰を記しつゝ常に或ひは昂まり或ひは沈みつゝ搖いで居ました。第十二章に行つて彼は又己に歸り、

其誇りの空しきを思ひ、記すべきは我が誇りではなくて神の顯現と默示とであることを見て、自己の上に現はれた神の力を書き始めました。そして此が又我が誇と結付いて居ることを感じ、そして其誇によりて傲ることなからん爲めに神は一の刺を己が肉體に與へ給へることを謝して居ります。『我を打つサタンの使者』と彼が云ふて居る此肉の刺とは何であるか、學者間にも異說あつて明瞭には解りませんが、兎に角パウロに取つて非常な苦惱であり、之が爲めに彼の誇りも傲慢も野心も慾望も幸福も凡て碎かれて了ふ樣な痛ましいものであつたことは確かであります。併し彼は此を悲しまなかつた。何故なれば彼は自分の性格の根本に橫はつて居る病を知つて居た。そして其病根はかゝる苦い痛みによつて始めて除かれ得ることを思ひ、凡べての嘆きは神に對する感謝となつたからであります。彼はかくて其『刺』に於て神の限りない恩寵を見出しました。そしてかゝる恩寵の與へられるに至つた其機會となりし自分の『弱さ』を却つて喜びとし、眞の意味にこの誇とするを得たのであります。『我に言給ひけるは我が恩汝に足れり蓋我が能は弱きに於て全くなれば也、此故に寧ろ欣びて自己の弱きに誇らん。是れキリストの能われに寓らん爲めたり。之に因りて我キリストの爲めに懦弱と凌辱と空乏と迫害と患難とに遭ふを樂みとせり、蓋われ弱き時に强ければなり』之がパウロの其貴い經驗を語つた言葉であります。實に彼に取つて自分の誇りを碎かれること、自分の失敗、自分の苦悶、自分の弱み、此よりも大なる喜び、又誇りはなかつたのであります。誇りの强い、名譽心のある、熱烈な人である丈けに其處に堪え難い苦しみがあつたのは勿論でせう。併し又其丈に彼は眞の神に於ける幸福、恩寵を感じたのであります。我々は此處に彼の性格を見ることを得ると共に、かゝる貴い經驗を積ましめた彼の信仰を深く味はねばならないと思ふのであります。

弱き時に强しといふことを、我々は恐らくパウロ

の如くに深く經驗することは困難でせう。併し小さい淺いものではありますが、我々の經驗の中に其が全くないとは言へません。即ち其眞理は我々に同感し得ない程のものではありません。知識のある者は自ら知ありと自信する時に、其誇りが彼の凡ての知識を覆がへし去るので、知識なき者こそ自らの缺陷を悲しみつゝ益々努力して眞の知に達するものであります。ソクラテスが『知らざるを知る是れ眞の知なり』と言ふたのは此意味であります。之と同じ樣に自分が徳ありと悟つた時に、傲慢不遜が始まり、自ら反省して罪を悔ゆる心がなくなり、神の前に最も小さな者となるのであります。人間の眞の幸福は彼が幸福を持て居るといふことではなく、未だ持たないものを努力して居ることにあるのです。其處に理想が生れ、理想に對する不斷の向上進歩があり又謙遜な心が成立つのであります。罪惡の意識が屢々宗教心の出發點となるといふのも、斯かる所から來て居るのであらうと思はれます。過去の偉大な宗教家の傳記などを見ると更に之が明かであります。例へばオーガスティンのあの悔懺錄にあらはれて居る深刻な宗教的經驗は彼の前半生に於ける罪惡に對する懺悔がなかつたら成り立たなかつたかも知れません。又中世の修道者などの傳記にも此に似寄つたことは多くあります。限りない罪に對する悔悟が彼等を潔くし神聖な純潔な聖者となしたのであります。

實際人は自ら强しとする時に弱く、弱しとして神の力に頼れる時に最も强いのであります。何をも有せざる如何にも弱い人が實際過去の歴史を動かす程の大きな力を持つて居た例は、我々の屢々聞く所であります。中世の聖ベルナードの如きは其一例でせう。彼は一介の小さな修道院長に過ぎなかつたが其信仰に基づける力は當時の法王始め獨佛英などの帝王諸侯等を指導し支配して居た。ミランの監督聖アンブロースの話も我々の忘れることの出來ない所です。彼は正義と信仰とに基づいて、當時赫々の偉名を負ふて居た羅馬皇帝テオドシウスをして彼の膝

下に其過を悔悟せしめたのであります。
終りに我々は深くパウロの言葉を味ひたいと思ひます。其は空言ではない、かゝる性格と信仰とを持つて居た天の使徒の貴い經驗を通して發せられた活きた言葉であります。我々は此句を語つた彼自身と共に此眞理を記憶して、人生に於ける光としたい。此が得意の日に於ける戒しめとなり、不幸の淵に於ける慰めとも奬勵とも感謝ともなる樣に、深く記憶したいと思ふのであります。

献身論

（羅馬書十二章）

山室軍平

信ずる神に捧物をすると云ふ事はどの宗教にもある。或は食物のお初を供へるとか、或は刈入れのお祭りをするとか云ふ風に。我が聖書の中からも斯う云ふ事實をいくらも見出す事が出來る。最も古い所で、カイン、アベル兄弟の捧げ物、否なほ古く神は罪を犯したアダムに獸の皮で拵へた着物を着せてお遣りになつたと云ふ事がある。事實とすれば神に捧げ物をするといふ事は、アダムの昔からあつたと見られるのである。下つてはノアが洪水の後に感謝の祭壇を築いて犧を捧げて居るし、アブラハムが神の命を受けて一人子のイサクを迄捧げ物にしやうとして居る。モーセの律法中には、空手で神を拜しに行つてはならぬとある。斯く擧げていへば、其の例は際限なくあるが、茲に注意すべきは其の心である神に如何に立派な献げものをしても、其れに伴つた心が無かつたならば、他宗教はイザ知らず私どもの

信ずる神のお喜は決して得られないのである。此の事實も聖書の中にいくらもあるが、先づイザヤ書の初の方を讀んで戴きたい。私がロンドンに居つた時ブース大將のお供をして其地の集會に行つた事がある。數回の集會の後私は其財政上の得物丈でも實に千二百圓の多きに逹して居つたのに驚かされた。これを大將に告げると『結果丈見れば如何にも立派だ。けれども入れた人々の動機にも立ち入つて考へて見なければならぬ。殘念乍ら此の中にはコンサイエンス、マネーといふものが澤山に入つて居る』と答へられた。或人が神に願を掛けた。若し叶へて下されば酒樽を一つ差し上げますと約した。願は叶つた、所が酒樽が惜しくなつた。それで放つて置いた或る時の事此人は酒樽を車に積んで外へ出かけた。道に川があつて運惡く車は小さい橋の上でひつくりかへつた。酒樽はドン／＼流れて行つた。あれよあれよと呼ばつて居る時ふと昔神樣と御約束した事を思ひ出した。それで俄かに大きな聲を上げて『オ、神樣よお約束の酒樽を今獻げます程に流れて行きます分を御納め下さい』と云つた。此な獻げ物が何になるか。神に賽錢を上げるにコンミッションでも持つて行く積りで居るのである。僅かなる物を以て神を自分の自由に買ひ取らうと爲るのである。不敬も甚だしと云はなければならぬ。こんな物に獻げ物等と云ふ名を付けてはならぬ。神への獻げ物にはどうしても誠の心とくだけた靈と身體とが添はなければならぬ。靈と誠とを以てのみ神に仕へる事が出來るのである。

私共はクリスチアンの間から、よく獻身と云ふ言葉を聞く、之は結構な言葉である。けれども其眞意味をほんとに理解して云つて居るのであらうか。私は此所で少しく其の說明を試みやうと思ふ。此が蛇足になれば寧ろ幸である。まづ裏面より似て非なる獻身を上げて見ると、

一、熱中する事。如何にも世間體獻身に見える。けれども我がクリスチアン仲間では通用せぬ。鹿を

追て山を見ないのは結構な樣でも劍呑である。昔支那の或所にお祭りがあつて道の兩側には露店がぎつしり列び我が淺草の樣な人出であつた、所が此の人中で兩替屋の店の錢金を掻さらつて逃げた男があつた。勿論すぐに捕へられた。役人が『此晝日中、しかも群衆の中でどうしてそんな事が出來た』と詰ると、『如何樣人が澤山居りましたなア』と答へたさうだ。彼に見えたものは全く金丈であつたのだ。世の中には名譽に目がくれ富に目がくれて他に對しては一切盲目と云ふ此の男の兄弟分が多いのではないか。

二、宗教とか慈善とかに一身を委ねて了ふ事。これも直ちに献身であるとは云はれぬ。勿論宗教とか慈善とかには献身的に働く人が必要である。けれども此の道に入る事が献身だとは言ひ難い。主よ主よと言ふものが天國に入る事の出來るのでは無い。否惡を爲す者は我より離れ去れと大なるお叱りを受けねばならぬ。もつと極端に云へば宗教等に沒頭する事は道樂である。反つて世の中には祈りをしたり聖書を讀んだりする閑の無くつて居つて献身的な人がある。奴隷廢止の爲めに死ぬ迄働いたウイルバーホースの如き其例である。

三、宗教上に奔走する事。主は再び『爾多端により思慮ひて心勞せり然れども無て叶ふまじき者は一なり』とマルタへの御言葉を我々の上に繰り返し給ふかも知れぬ。

四、或る事の爲めに死する事、或は献身的行爲と認められそうな事もあるが信仰の標準に照して見ると落第である。死ぬる丈が大切ではない。私どもは死ぬべき目的の爲めに生きて居なければならない。献身と云ふ事は死ぬる時でなければ出來ない樣なものではない。

然らば眞の献身とはどんなものか。聖書に敎へてある『神の要求し給ふまゝに私どもの身に附ける一切を捧げて私の爲めに生きず、神の爲めに生き神の名の爲めに毎日の生活を生活する』のである。換言

すれば『神の成れと命じ給ふまゝに成り、神の爲せと宣ふまゝにする』と云ふ事である。私は然か信じて居る。

さて、其の眞の献身の人になるには、

一、第一着手として、凡ゆる罪と縁を切らねばならぬ。罪を犯し乍ら神に身を献げて居る事は出來ない。或人が『多くのクリスチアンが罪を扱つて居る所を見るとモーセの母がモーセを扱つた樣子が思はれる』と云つた適評だと思ふ。皆自己の罪を苦心して隱し、現れゝば理由を設けてどうかして存在せしめようとして居るのである。惠の大海に乘り出す事を躊躇して罪の小海に浮いて居るのである。早く思ひ切つて罪の鎖を切らねばならぬ。

二、斯くて罪より離れたならばあとの體の凡てを神に差し上げるのである。（哥林多後書、五〇一九以下參照）

三、一旦差上げた上は『世の救ひ』と云ふ事を目あてにしてのみ生くる覺悟がなければならぬ。牧師のみ之れに與り信者は不關焉とあつては誤りも甚しい。天下の民は貴賤貧富高下を論ぜず、凡て基督と同一の目的の下に『救ひ主』とならねばならぬ。如何にして人を救ふか。如何にして天國を建設しようかと苦心しない樣では、いくら基督敎が傳はつても何にもならぬ。では其の方法はといへば他ではない、各人各個己れの業務の上に其目的を建て敎育者は敎育者として文學者は文學者として宗敎家は宗敎家として商人は商人として救世濟民の目的を遂すればよいのである。

四、其上で更に十字架を負ふ事を厭はぬ强者でなければならぬ。十字架を取つて我れに從ふ者でなければ我が弟子になる事は出來ぬと主も宣ふた。十字架は此の世に於ける苦しみの極である。恥の極みである。我々は救世の目的の爲めに、この苦しみを受けようと云ふのである。濟民の目的の爲めに此の恥を受けようと爲るのである。

さて、此の献身を實際生活に當てはめればどうな

るか、身を捧げる献身はやがて心を献げる献心である。眞に献心すれば自己の意志を行ふと云ふ樣な氣にはなれなくなる。必ず『御心のまゝに爲させ給へ』となる。自分の心は神に向つて十分に開放してしまへるのである。

心の戶の外には神が立つて居られる。我には急いで此の戶を明けて神と樂しき食事を共にするの光榮を得なければならぬ。私どもの心は汚れて居つても嘗て馬槽の中をさへ忍び給ふた主は必ず忍びて入り給ふのである。私共は此の喜びの爲めに心を献げるのである。身を献げるのである。既に献げた早や此の四肢五體は凡て神のものである。主のものである。此の耳は既に神のものである、神の喜び給はぬ言葉を入れる事は出來ぬ。此の眼は既に神のものである神の御心に叶はぬものを見てはならぬ。此の口は既に主のものである。主の御心に脊いた事を語つてはならぬ。心にない親切を言つてはならぬ。只此の舌は神の證明の爲めにのみ働かすべきである。此所によい例がある。印度の裁判官にタッカーといふ人があつた。二十二萬圓の俸給を受けて幸福なる生活をして居つた。所が或る日の事一新紙が齎したブース大將の働きを見て忽然官を棄てゝ母國(英國)に歸り意を決して救世軍士官を志願した。最初の中は中々願も聞き入れられなかつたけれども、無理に志願して新聞賣りから初めて、苦心慘憺遂に士官に成る事が出來た。すると早速印度に遣はされた。氏は與へられたる地に再び戾つて熱心に傳道した。けれども何故か少しも信者が出來ない。氏は甚だ迷つた末『自分は今まで英國人であるとの心を堅く握つて居つて印度人に說いて居つたから失敗したのだ』といふ事に氣が附いた。そこで從前の自分の持物は一切捨てゝ印度の僧侶の風になり、徒足殘飯を乞ふて步きつゝ說いて巡つた。馴れぬ業に彼は病人の如く疲れた。熱い印度の土は容赦なく歐州人の軟い足を燒き且つ裂いた。彼は遂に前後の辨へもなくなつて廣野の或木の下に仆れた。そのまゝ眠つてしまつた。

其所へ通り合せたのは印度の三人の紳士であつた。氏の日頃も知れる彼等はつい歩を止めて、頭の上より足の先まで裂けて血のにぢんだ足の先きまで眺めた。三人の眼は濕んだ。彼は二十二萬圓の金を得て笑つて暮せる身分である。それを捨てゝ斯く苦めるはそも何の爲めぞ、神を現はさんが爲めである。彼をして斯くあらしむる神の力の亦如何に大なるぞ。三人は睡れるタッカーに聲なき教を受けて去る事が出來なかつた。靜かに其の醒めるを待つて傳道を乞ふた。それより三ケ月の後には實に七百人の信者を得た。これが今日の印度救世軍の最初なのである。實にタッカーの『神の爲めに』と云ふ精神は足の先きにまで現はれて居つたのであつた。我々もどうかタッカーの如く心も身も事業も凡て神に捧げて暮したいものである。今事業と云つたが人は兎角自分勝手に仕事を極めて終つて置いて、後から『めぐみを給へ』と祈る風がある。これでは餘り勝手過ぎる。何故初に『主よ我は何を爲すべきか』と聞かないか斯くて其命じ給ふ所に從ふならば『惠みを給へ』と祈つても道理がある。又我々の財産は樂する爲に賜つたものでない。神よりの預りものである。金があると云つて喜んで居るのは少し可笑しい。神は決してそんな不公平な喜を人に與へ給ふものでない。凡ては神の御旨にある事なのである。斯く委托されたものであるから、之を不正な事に消費しては申譯がない。時も亦エホバのものである。時間の使ひ方は心しなければならぬ。我々は亡びゆく人を救はんが爲めに此の貴き時間を費すべきである。世には身をやつすに忙はしくして一日に三分の反省の時の得られぬ人がある。五分の聖書を讀む時の無い人がある又献身の人は神の爲めに全精力全家族も捧ぐべきである。若し愛する我が子が苦められても其の爲めに世の多くの人が救はるゝならば、喜んで我が子は苦めなければならぬ。

かく献身的の生活をしたとして、然らば其の結果は如何になるか。先づ羅十二章を讀んで載きたい。

神に凡てを献げたものは神に生けるものである。神に由つて生くとは何たる幸福な生活であらう。しかも神は人を擇び給はぬ。神の手に凡を委ねさへすれば神は必ず用ひ給ふのである。神に用ひらるゝに至つて殆んど解釋に苦しむ様な大變化を來した人がどれ程あるか分らない。大將ウイリアム、ブースが高齡に達して後、或人が彼に向ひ。

『大將よ閣下が神に用ゐられて、一生の間に斯くも偉大なる救世濟民の事業を成し遂げれらた秘訣を一言に言ひ現はせばどう云ふのでありますか』と尋ねると『大能の神をしてウイリアム、ブースにある凡ての物を有たせ奉る　これ我が生涯の秘訣である』

と言はれたそうである。實に献身の生涯は有用の生涯であり。幸福の生涯である。二心などを持つて居つて碌な生涯の送れた例はない。我々は何の躊ふ所なく凡てを神に委ねて安全なのである。安全な筈である、卑近な例が、今一人の娘があつて母親に『今日以後私の凡ては母様にお任かせします』と云つた時『よし覺えてお出で私の好きな様にいぢめて上げるから』と答へる母親が何處にあるか。神の我等に於ける實に母以上である。神に凡てを献げさへすれば我々の生涯は實に安全である永遠である。而して成功である、否更に歩を進めて云へば献げるのではない、元來が神のものなのである。ポーロは云つて居る。『汝等何の貰はざるものを待つか』と

『身もたまも元より神のものなるを、献げたりとも思ひけるかな。

今日を得たのも神の愛である。我々は愛に感激すべきである。其結果が献ぐるといふ形になるのである。

スコットランドの某教會で外國傳道の爲に集金演說をした事があつた。後に盆をまはすと一人のメイドが十圓の金貨を入れた。牧師は一時の感情で出したものと見て注意して返した。翌日の黄昏そのメイドは又静かに訪れて涙を以て神の愛を感謝し更に一

枚を添へて尙足らざるを歎いて歸つたといふ話を聞いた事がある。實に獻身の生涯は善美、高尙、幸福なる生涯である。これも神の惠を以て開き給ふた道なのである。

「わが神の諸々のあはれみを以て世に勸む、その身を神の心に適ふ活ける獻物として捧げよ」と

その昔神の用ひ給ふた人は凡て獻身の人であつたエノクは神と共に歩いた最初の人である。ノアも神と共に語つた。凡衆の嘲笑を顧ず、神の命のまゝに長日月を費して方舟を造つた。アブラハムは愛する獨子をも獻げた。モーセは己の身をかけて埃及より同胞を救はんと祈つた。ダニエルは獅子の孔に入る事も拒ばなかつた。ポーロは凡ての者の芥となつて働いた。フランシスコは位置と希望と名譽とを弊履の如く棄てゝ、艱める人の爲に働いた。新島先生は故山を出づる時、

「もの丶ふの思ひ立つ田の山紅葉、錦を著ずてなど歸るべき

とあつたにも拘はらず、久方ぶり歸郷の詠は

「ふるさとに飾る錦は函の中、身にまとふべき時にあらねば

といふのであつた。石井先生は醫師たらんとする凡てを捨てゝ、孤兒救濟の爲に苦戰された。

米國のエヂソンは大海の波が岸に打ち寄せて居るのを見て「オヽ不經濟な」と叫んだ。基督は今此所に集つて居る皆樣の勢力を見て、同じ歎聲をお洩しになる事はないか。あゝ此の中に誰か一人、身を捨てゝ世の救の爲に立つ人はないか。其人の心は必ず主は知り給ふ。人は知らずともよし。これが十年の後になつて如何に其力の大なりしかに驚かさるゝ事であらう。神の心に適つたる活ける獻げものは無いか。

印度みやげ

ミス、テーラー

私共は上代の歴史を繙く度に華やかであつた印度の昔を忍ぶ事であります。ソロモン王が神の殿を造つた時には澤山の寶玉や黄金が印度から運ばれたと申ます。只今でも町を歩いて見ますと如何にも澤山な寶玉をかけた人に行逢ひます。といふのは彼の國では金を蓄めるよりも寶玉を蓄めますので、從つて富人貴人は夥しい寶玉をブラ／＼させて歩いて居るのであります。話の様ですが一の耳に十三個もぶら下げて居るのや、鼻の先きに一千弗をかけて居るものなどもあります。これらは上流の方ですが貧しいのになると鉛なんかを足や腕に巻きつけて居ります。それでも構はない彼等は着けて居りたいのです。慣れぬ私共には實に不思議に見えますが、さて斯んなに飾り立てゝ居りましても一歩立ち入て其の懐中の様子を見ますと概して驚く程のプーアであります。更に一歩進めて婦人を通して國状を視ますと更に／＼プーアなので御座います。

今日は其の中の宗教に就て少し申上げて見ませう。御承知の通り此の國には實に多種類の宗教があります。石にでも頭を下げる最も單純なるものから宇宙の根本原理を説く哲學に至る迄凡そ二十七種。而してその一宗教を取つて見ても三千三百萬の神を有するものがあるのです。實に宗教を離れて印度を説く事は不可能である程宗教的の國なのです。今少し實際の事を云ひますと。此所には世界に又とない立派な赤く塗られた經文の様なもの丶書いてある石があります。朝早く此の附近に參りますと聖場を拜みに來る僧侶から貰つた黄色い花を耳につけた人に、いくらでも出逢ひます。又往來に出ますと額に何か塗り附けた人が歩いて居ります。これは其の宗派の表徴なので、子供等が多勢遊んで居る時などは其の顔を眺めて、各其の家の宗教を知る事が出來る

のであります。こんな風に多くの宗教があり澤山の神がありまして非常に旺な樣でありますのに、其實印度の國は少しも救はれて居ないのであります。これは宗教そのものに價値のないと云ふ事と印度の男子には宗教があるが婦人には神がないといふ事とが原因して居ると思はれます。印度の婦人は牛馬と同等視されて居ります。牛馬は神を拜せずと云ふ前提が出れば、どうしても婦人は宗教界から逐ひ出されてしまはねばなりません。斯樣な狀態にある印度に最も救ひとなるものは基督教なのですが此の傳道が亦實に困難なのです。それで千二百年頃から入つて居り乍ら其進步は遲々として居ります。といふのは彼の國は二百六十五ケ國に別れ三百の方言を持つて居ります——印度を一國と御考へになつては分りません——それで聖書一つでも三百種に譯さなければ通じません。宣教師は先づ語學を研究しなければなりません。そんな風で實際只今でも未だ一度も基督教の教師が足を入れた事のない地方が澤山あるのであります。內地北部とか。セイロン島內部とか。それでも一時に三萬人の信者の增した事などもありまして彼等に要求があると云ふ事は證明されて居るのでありますが、是に應ずる丈の準備が出來ないのです。で印度に於ける信者の數などと云つて發表になる事がありましても實際は、それよりもつと多數であらうとの想像もつくのであります、只今のかゝる有樣は印度に取つても氣の毒な事だと思ひます。しかし此頃では印度の宣教師も、これは外國人任せでは不可いと氣が附き出しまして、熱心に其の事業に取りかゝりました。眞に幸な事と思ひます。既に傳道會社等も十年位前に彼等の手に由つて立てられて居ります。女子青年會も他國に於けるが如くに出來ました。此の方は印度人許りではありません。英本國から派遣されて居る商人。千四百萬人の雜人種——有名無實でも信者は信者——。英人等が中心になつて建てゝ居ります。又土人の爲めの青年會もありますが、一つの所に青年會が建つと必ず此所の國

語を話す支部を造る事にして居ります。私がカルカッタに居りました時には、三ヶ所の言葉を話す青年會のあるのを見ました。一體に青年會の働きは活氣がありません。それは會員中に他宗教のものがあるからであります。大變に嚴しい信者になりますと往來を大びらに顏を露して歩きません。大抵は家の奥まつた所に居つて瞑想して居ります。若し必要があつて外出すれば必ず覆面してまゐります。いつかこんな事がありました。一印度婦人が青年會の會員になりました。或時會のテニスが仕たいと云ふので親に願ひました。所が會は不幸にして賑かな所にあります。婦人はたつてと願ひますと先づ父親が自ら下見聞に來まして往來からも見えない樣にと目かくしをして、やつと許されました。

青年會の重なる仕事は千四百人の雜人種に對して行はれ、實際印度人に向つては働いて居りません。商店の賣子。電話交換手。タイプライター、皆印度人は出て居ないのであります。女子青年會は此等の人の爲めに學校を設けましたり。鐵道院の官吏の爲めに働いたり。聖書の組や、社交の組を設けたりして居ります。コロンボの青年會などは、世界のレコードを破つて全部が聖書の組に入つて居ると云ふ有樣です。印度は御承知の通り熱い所でありますから、青年會の多くを避暑地に設けた事は思ひ付きだと思つて居ります。旅行者の友の働きも段々行はれて居ります。それでも未だ〳〵働くべき餘地はあるのでありますが、先きにも申すやうに人が足りないのです。が兎に角凡ての仕事が目下印度の若い婦人に向つて働かれて居る事は注意すべきです。近頃彼國には大學に入つて居る女子が澤山あります。これは外も歩いた事のなかつた母時代の生活から見て大した變化であります。從つて現代の母には新しいこれらの娘を指導する力がありません。青年會はこれらの婦人の爲めに良き母たらんと努めて居ります。又印度の醫學校は女子の爲めに門戸を開いて而かも官費で募集して居ります。卒業後の賣れ行きはよ

し、多くの女子は喜んで入ります。青年會は彼等が更に靈的に良醫となる樣にと祈つて居るのであります。

今や世界の各所では神の爲めにソロモンのそれよりも立派なものを建てようとして居ります。其時には婦人は各、ソロモンの宮殿を飾た印度の昔の寶玉よりも、更に立派なものを持ち寄つて飾らねばなりません。それは印度の婦人も持つて居るのであります。然し彼等はそれを知らないで居ります。どうか皆樣が印度の婦人が如何なるものを寶玉として神にも献げ、身の飾りとをすべきであるかと云ふ事を悟る事の出來るやうに祈つて戴きたいのであります。

愛の苦痛

木岡莞爾

「親思ふ心にまさる親心」といふが、子に先立たれた程、親の心を痛めるものはない。ある學院の神學教授の家庭に一人の秘藏娘があつた。天才が音樂の上にほの見えたから、兩親は之に大なる望みを屬して音樂學校へ通はせたが、あたら卒業間際に二十四歳を一期として歸らぬ旅路に赴いた。彼昏睡狀態のうちにも五本の指頭はピアノの鍵盤を走るやうに始終運動を續けて居つた。あはれ此破れし樂器に殘れる希望の一線は、今何處に其餘音を弱々たらしめて居るかかゝる死に對し兩親の悲嘆は思ひやるだに哀れであつた。教授は神學上神の存在を認めて居るものゝ、今は情の方から慈愛深き神の聖旨が分らなくなつた。なぜ彼の天才を發輝せられなかつたか、此世に彼を與へられた天意が分らぬと獨り怨みかこち。しかも神學教授としてうかとは他人に自分の胸の内をあかす事の出來ぬせつなさ。もう悲しみは通り越して涙も出なくなつた。かくても學校へ出て教授せねばならぬ心の苦しさは、恰も熱鐵を嚥下するの思であつたそうである。

此瞬間胸中に閃いたものは、父なる神が其愛子を此世に下し賜へる時の天意は、如何であつたらうとの一事であつた。「神は其の產み給へる獨り子を賜ふ程に世の人を愛し給へり」(約翰傳三の十六)しかも「主は我らの爲に生命を捐て給へり」(約翰一書三の十六)

かく程に深い神の愛其の切なる苦痛に御同情申上げたとき。初めて教授の目から涙が零れた。神の御苦痛と、教授の心の痛手とは比べものにならぬ、それが大なる慰めとなつた。數年間神學を說かれた居た教授は、今といふ今やつと父なる慈愛深い神を會得する事が出來たことを喜ばれた。かの縷の如き餘音は、教授の心を通していつまでも神の御座に響けて居る事であらう。

「理想」の婦人 （一）

林静太譯

"See where she stands! a mortal shape indued
With love and life and light and deity,
And motion which may change but cannot die;
An image of some bright Eternity;
A shadow of some golden dream; a Splendour
Leaving the third sphere pilotless; a tender
Reflection on the eternal Moon of Love,
Under whose motions life's dull billows move;
A Metaphor of Spring and Youth and Morning;
A vision like incarnate April, warning,
With smiles and tears, Frost the Anatomy
Into his summer grave."

SHELLEY *Epipsychidion.*

吾人は既に、母として、妻として、娘として、姉妹として、友として等、種々の使命に於ける婦人を研究したのであつた、而も猶其處に、婦人の働かんとする一部面——理想に於ける婦人——が殘存つて居る。詩人は想像の境裡に棲息して居るのであつて其想像境裡に君臨するものは、實に彼が夢想せるところの婦人である。何れの男子も總じて彼の心魂の裡には、斯種詩人の如き或るものを有して居る、其或るものとは、戀愛に由つて喚發さるゝものである金色燦爛たる將來を夢みつゝある青年は、彼が胸中の女主人公たる少女をば、絶えず其眼前に理想しつゝある。彼の働くところ彼女の爲であり、彼の畫策するところ亦彼女の爲である、彼女は實に、其男子の將來に對する鍵鑰を把握つて居るのである。而して世間普通人の感ずるところを忌憚無く吐露し得る詩人は、更に又其兄弟達の語るに躊躇して居るところの、此默然たる精神をば痛切に歌ふものである。即ち總ゆる青年各自一個のビアトリス（理想の婦人）を有して居る、然れども其戀を語らんと欲する多くの青年が中にても、自己の戀を語り得る者披瀝し得る者としては、一人のダンテを除いて他に無いのである。實に神學の表象たるビアトリスは、戀人に存

する最偉大性に訴へて、『凡ての陋劣醜惡なる事物より』彼の心魂を高擧せしめたる婦人中の一人であつた。

是れぞ戀愛の神聖なる力であり、开に依つて世界に齎されたる神聖なる使命である。是れ一面に於ては、總ゆる男子をして、永遠の平和を知らしめ、無窮の美を解せしめ、更に其衷情に潛める理想をば覺らしむるものである。戀愛の詩や悲歌やを作さしめたのも亦是れあるが爲である。或る種の婦人は常に眞に能く或る種の男子に理想を供與するであらう。如斯婦人は又常に、物質以上に精神的事物の價値多きことを男子の爲に明示し、男子の思想をして、總ゆる地上の見るだに忌はしき衝動より離れたる、聖淨高潔なる夢想裡に飛ばしむるであらう。如斯も亦婦人の双肩に置かれたる貴重なる使命である。即ち婦人が此使命を成就せしむることに失敗した時、其社會の受くる損失は洵に大である。然りダンテの愛は、詩人の標範的理想の戀愛であり、世界有數の敎養ある男子としてのペトラークの愛は、其情中に悲愁憂欝を加味したるものであり、多くの中より特に一人吾が意に滿ふべき婦人を選擇し得たるブラウニング氏は、最後迄戀愛の光耀と熱情とを保持したのであつた。此等三者各々其愛するところは、完全き婦人の典型である、而して其情操中に一毫と雖も、地上の汚、世俗の穢を交へない、從つて不滅にして永久の愛なることに於ても亦、三者軌を一にして居るのである。

最も佳調に富み、清新の氣に横溢せる詩文を皷吹したところの、もつと一時的性質の愛情がある。如斯ものを索むれば、スペンサー(譯者曰、英國の詩人、一七六九——一八三四)が其詩に『谿間の寡婦の娘』("The widow's daughter of the glen")と詠ふた、彼の非凡の才藝を有せる一婦人、ロサリンに對する戀の如き即ち开である、然れども後『牧人の暦』("The Shepherdts Calendar")を著はすに及んで中に己は『不信實にも見捨てられ』("forsaken unfaith-

fully")己に代つて他の者が『不忠實にも待遇された』("received disloyally")等、要するに彼女の愛情が、メランサンに移り行いたことを語つて居る。ウォルラー（譯者曰、英國の詩人、一六〇六――八七）のサッカリッサに於ける、サーレイ（譯者曰、英文學に無韻詩を創始せし英國詩人、一五一七――四七）のゼラルデキンに於ける、其他フキリップ●マーストン（譯者曰、英國の盲詩人、一八五〇――八七）の戀愛の如き、發して熱烈なる嘆美の詩歌となり、讀む人の心琴に觸るべき韻律の深刻なるものとして現はれた。然れどもビアトリスに由つてダンテの心魂に刻まれたる、永久不滅の印象と、ラウラに對するペトラークの熱狂的冀望と、其妻に對して有したるブラウニング氏の、溫柔しき崇慕とは、此等の婦人の名をして直ちに、理想としての婦人の代名詞たり、『理想』の婦人と同意義語たらしむるものである。

詩聖ダンテの理想の佳人
ビアトリス

ダンテが初めてビアトリス●ポーチナリと相逢ふたのは、彼が九歲の時であつた。开はフローレンスの一富民なる、ビアトリスの父ファルコの催に係る五朔の祭――當時の慣習に從ふて、百花爛漫の季節たる、春の來たのを迎へ祝すると云ふ――に招かれた時のことである。當時ビアトリスは年齡も漸く八歲の少女で、腰に帶を締め身に眞紅の上衣を裝ふたる、其風姿は最と愛らしくも亦麗はしく、殊に其態度は珍らしい迄に優雅であつた。又其顏面は靑白き眞珠にも似たらん如く、其眼は灰綠色の、ダンテが其『淨罪界』に、導女(たりし此ビアトリス)を誦ふて『綠柱玉』("The emeralds")と言つて居るものである。即ち九歲の少年ダンテが眼にも、彼女は天の使の如くに映じた、此時此初會見の折、內心の最も隱密なる部分より迸り出づる愛てふ心情は打戰き打慄ひ、頓て身內より叫べる聲ありて『我を支配せんとして來れる、我に勝る強き神性、此處(眼前)に在す』と言ふが如くに聞えたと云ふ。

斯て空しく歳月は遷り行いたが、其間ダンテは、或は半ば神聖のものとし、或は後年彼の見し如き此世を離れたる、或る世界に往來せる、『天の使の最と稚きもの』として崇め尊みつゝ、只管此少女をのみ懐み慕ふた。而も青年時代に達してよりは此印象は一層深甚となつた、實に戀は彼ダンテの終始を一貫する、所謂常住不變の主となつたのである。然るに其後九年を經て、一日ダンテは、稍年長の二人の婦人の間に挾つて、白衣の身も撓かに歩める、年來思ひ焦れし彼の美はしのビアトリスに邂逅ふたが、擦れ違ひ樣彼女はダンテに言葉を掛けた、其時彼の喜悦は如何許りであつたらう、『愛と言ふの以外、己が心を言ひ表はさん如何なる言語もなかりき』と語つた程に歡喜に滿ちたのであつた。

"As she passed on, she bowed her mild reproof
And salutation to all men of worth,
Lifting the soul to solemn thoughts aloof,"
(D. G. Rosetti's translation.)

『過ぎ行く時に首をたれて、
彼女は溫柔しく言葉を掛けぬ
心すぐれし人よりの挨拶に、
我が心魂は莊嚴き想念に引き上げられぬ。』

扨も遣る方無き想ひを彼の詩集『新生』("Vita Nuova.")に洩して、喜悦の餘心醉へるが如く獨り己が室にと靜座し、曩日紅衣の少女の、斯く許り慈愛溢るゝ如く又優雅なる婦人となれるかと、唯其事をのみ思ひ續けた。さる程に一種豫言的の幻象は彼に現はれ、即ち彼は火焔の裡に立てる愛の神を見た、而して又

"On his arm
My lady with a mantle round her slept."
(D. G. Rosetti's translation.)

『上衣纏ひし吾が乙女は
其腕にぞ凭れて眠れり。』

其愛の神は燃ゆるが如きダンテの胸に御手を置き死せるビアトリスを天の御國にと運び行くを見た。

其敬慕者(即ちダンテ)の詩を通して彼女を觀る時に於てのみ、吾人はビアトリスに就いて語ることが出來る。變容せるもの、疑も無く彼女は幵である。彼女は愛の幻影である、愛の化身である、此生ける(現身の)妙齢の處女は、美の齎せる總ゆるものを以て、彼を愛着せしめた、然れども彼女は遂に彼の理想である、彼の精神的實在である。其後彼女は人妻となつたが、而も猶彼は彼女を愛するに些の變ることが無かつた。彼女がダンテに與へたところの挨拶は悉く記錄されて居る、彼は唯其言葉を受けるが爲に生きたのである、ダンテは世にも卓れたる其挨拶を希望に、『何人が如何なる害惡を吾に加へんとすればとて、若し其時佳人の斯る溫情と好意とに接しては、吾は直ちに其人を寛恕さん』と言つて居る。彼が精神上の疑惑や、又其疑惑を氷解せしめ得たる時の喜悅や等は、彼の『新生』てふ短詩短歌の、驚くべき委曲に涉る題材を形作らしめたものである。嘗てダンテが他の婦人を戀へりとの流言を、ビアトリスが傳へ聞いて、彼女はダンテを欵待することを嫌ふたとのことであるが、軈てビアトリスの心は和ぎ彼を篤く欵待したので、ダンテの周圍には再び、愛の日光は照り輝くに至つた、即ち大空の夜も猶輝き渡るの心地がした。實に彼はビアトリスの美を稱ふるに嘗て倦むことが無かつた。『美人は相應はしき靑き眞珠にも似たらん顏面を彼女は有しぬ』と言つて居る又彼女の眼の色に就き、『新生』中嘗て一言幵に及んで居ないけれども、後、彼の神聖なる幻象(神曲)の中には、彼の座せる位置の光線に由りて、其眼は『綠柱玉』であると記して居る。眼色の綠なると、褐色なると靑きとは、彼ダンテに取りて何等關はりの無いことである。唯彼の歌はんと欲するは、其眼の表白せるところのものである、即ち曰く、『吾が愛する佳人は其眼に無限の愛情を湛へたり』と。(實にや其感ずるところは眼色に非ずして其表情である、其中に潛める貴き淸き愛の光である。)ビアトリスが街路を行く時、人々皆彼女を見んが爲に走り出でゝ、彼

女は單なる婦人では無い、實に天上の美はしい使の一人であらうと、許し合ふたと云ふことである。斯く人々の語るを聞き、打集へるを見ても、曖氣にも誇慢の顔色さへ見すること無く、一層の謙情を以て過ぎ行いたのである。

"She walks with humbleness for her array,
Som. thing a creature sent from heaven to stay
On earth and show a miracle made sure."

(D. G. Rosetti's tra.slation.)

「謙愼れる樣にて彼女は道行きぬ、
天津國より送られしもの丶しばし此世に留りて
不思議の業を知らしめんごと。」

如斯美も靜淑も、如斯慈愛も長く此世に留らなかつた。軈て悲哀の日は來つた。ビアトリスは

"Has gone up into high heaven,
The kingdom where the Angels are at peace,
And live with them, and to her friends is dead."

(D. G. Rosetti's translation.)

「天津御空に赴きぬ、
天つ御使の平和に住める國に往き、
彼等と共に住ふなる
されど开は其友人には死なりける。」

今や己が故郷たるフローレンスも、擧げて吾が理想の佳人の爲に哀悼せるもの丶如く感じつ丶、只管ダンテは、悲泣哀哭に日を送る程の悲歎に掻き暮れた。其人より左程多くのものをも期待せざりしが如く見ゆる此一婦人に對して、如斯悲歎は奇異にさへも感ぜらる丶のである。兎まれ角まれ彼が『饗宴』("Convito")篇に於て、吾人に語る所に據れば、彼も亦他の人々の开の如く、哀傷遣る瀨無き心をば他に向け、學問に慰安を求めんとはした、(換言せば、ビアトリスを失へる詩人の悲痛は、轉て人生と世界其もの丶苦惱となつた)即ち彼はボエシウスやシセロを學び、哲學に幾分の悲痛を紛はすの術を見出した。然るに今や漸々次々ビアトリスの思想は、彼の研究の神聖なる標的對象と合致し、渾融するに至つ

たのである。即ちダンテに取りてビアトリスは、其研究の進むと共に、思索の幽冥界より彼を見下すべき『觀念』("idea")の化身せるものとなつた、彼最早生ける婦人(生前のビアトリス)に就いて思ふに非ず、其崇慕をば天上のビアトリスに注いだのである彼女は神學の表象となつた、彼は彼女が地上を步める時にも彌增して、是れに崇敬と愛慕とを捧げた。嘗て現世に於てダンテが命を懸けて愛せし、美はしき眞珠の面したる乙女ビアトリスは、今やダンテの思想を支配する神秘の聖女となり、彼が胸裡の殿堂に永遠に安置せらるゝこととなつた、斯して彼が曠世の名篇、不朽の傑作たる『神曲』は成つたのである

　實に彼女はダンテの翼翅を導く案內者であつた、又在るが儘なる彼を見し聖者であつた、而して其婦人の微笑に浴して彼の戀愛は、凡ての俗情より淸淨化したのであつた。さればダンテも亦彼女を紀念するに、嘗て如何なる婦人にも與へられなかつた言語を以てしようとしたのである。彼の神聖なる幻象(神曲)に於ける、地獄の暗黑圈の通過に、淨罪界の聖山の傾斜の登攀に、其導者としてヴアーヂルを送りし者は、實にビアトリスであつた。而して又彼が天界に入らんとする時、信と聖と愛との表象なる三種の糸に繡せる、緋色の衣を着け、薫り床しき橄欖の花冠を戴き、純白のベールも嫺雅に、一天より他天にと彼を導いて天界の諸星を經廻り、最後に最高の天界なる、神と其聖徒との第――『其純白きこと雪の比ならざる』――の光明無邊の淨土、永久に咲ける薔薇の國に、彼を導いた者も亦彼女であつた。斯て二人が赫々たる天上の光明に近邇りし時彼は、神の榮光に照されてビアトリスの美の愈々淨化せるを見た此時此靈光祝福の幻象に接せし時、ビアトリスはダンテを顧眄して微笑み、幵より其眼を他に再び轉ぜざる迄に、天父の御顏を拜するのであつた、玆にダンテはビアトリスに導れて、遂に永遠の愛に霑かれたのであつた。

　嗚呼此中世最大の詩人たりしダンテの戀愛は、總

ゆる理想的戀愛の標範として、典型として殘つた、而して吾人が男子に及ぼせる婦人の助力と感化とを通して、世界の歴史の上に婦人の働き得る神聖なる部分（The divine part）のことに就いて考へる時にビアトリスの幵の如きは、第一に吾人の念頭に浮ぶところのものである。傳記者は此題材をば、必ず傳へんとして居るであらう、然れども（傳記者に頼らずとも）ビアトリスは――其戀人に由つて――總ゆる男子の精神的理想として、殊に總ゆる婦人の渴望的理想として、永久に生きて居るものであらう。即ち最初はダンテが稚心の敬慕の的となり、次で青年時代の崇慕となり、而も其間秋毫地に屬ける情欲を交へず、而して遂に此婦人を紀念せんが爲に……産れ出でたるもの、是れ中世イタリーの凡ての信條と愛國心とを含蓄し、宗敎的文學的政治的等、諸方面の意味を寓せる、就中基督敎的文學中の上乘なるものとして、不朽の美果を結ばしめたところの『神曲』とはなつた。

天使島の一日

河井道子

記者曰　本編は河井總幹事來信の一節にして渡航邦人の實狀を知るべきを以て別に本欄を附して茲に掲載す。

七月廿五日の天洋丸には百餘名の日本婦人ありとの事を耳にしたれば廿六日移民局所在地なる天使島に訪問せばやと早朝家を出づ、先にも二回訪れし事のあれば、別に六ケ敷き事もなくて係員より許可を得て乘船す。抑々天使島とは桑港より約半時間にして達し得らるゝ風景よろしき島にして其一部は兵士の屯營所、一部は移民局、其裏に避病院等凡て美しからぬものゝ吹寄島なり。斯る場所を天使と命名せしは何故ぞやと人々の問ふも無理ならねど淋しき處悲しき場所、殺風景の土地を見舞て慰安を與へ、其を美化せしむるは天使業にしあれば至極よろしき名稱にあらずやと反問す。此日五十人餘の米人同所見物とかにて同船す。中には日本の男子も數人見うけ

られたり。移民局の建物は外見整頓して學校を連想せしむ。先づ短き棧橋を渡れば、正面に一大木造の二階家あり、其の後部の山腹に又男子收容所なる二階建の一棟あり、其左方に白亞の一棟は病院にして土手或は平地に咲亂るゝ花、植木等は園丁の苦心を偲ばしめ、海際に突出せる烟突は全島に送通せる電氣力を示し、構内を守護するが如くに双方に竝立せる事務員の住宅は玩具の軍艦の竝べるに似たり。先づ正面の建物に入れば爰は太き鐵柵を以て、左右を三四ヶ所づゝに仕切り、日本人は左、支那人は右に這入れと係員は叫びつゝありき。此は新渡航者の親又は夫、友人等の調を受くる場所也、此控所の左右は廊下にして諸事務所に通ず次に群衆と共に幾個の重き戸扉を通りて、二階に至れば、其廊下の騷々しき事火事場の如し、好奇心に驅られし見物の米人は停留せる支那婦人、日本婦人を見付けたればとて七重八重に取圍みて支那婦人の小さき足を見んとするあり日本婦人に寫眞結婚かと尋ね、夫の寫眞を見せよと

て手にせる包を取り上げて中なる旅行免狀を見て失望せる者もあり。何やら先方には一向通ぜぬものを英語にて問ひかけ、親切氣に肩を撫で居るあり。舍監の一人を圍みて樣々の質問に熱心せるあり。其光景に啞然として氣を呑まれし日本婦人の樣は繪になし得ぬこそ口惜しけれ。『一度も會見もせぬ男子と結婚する其心理が解らぬ、人道に外れて居る、かゝる制度を何故に放任して置くかしら？』と喰つてかゝらん樣子、返事もさきかでさも呆れ果てし表情もて去りし婦人もありき。實に寫眞結婚は米人に惡感を惹起せしむるもの丶一にして誤解も是より生ずる事多からむとおもはる。頓て見物人の一行去りて大風の後の如くになりたれば、今度は獨して其あたりを見廻したるに、百餘名の同胞姉妹一室に群り居て或は三段になりたる狹き床の上に横り居るもあれば、着物更ゆるもあり、隅のベンチに腰掛けて人待顏のもあれば、卓に俯き病る姿も見られたり。何も體格檢査の番を待侘びて、紫、靑、赤の小風呂敷に旅劵を

包みて手にして氣の落付かぬも無理なし。健康診斷は眼と便が主にして日本にて兩三度試驗に通りし者さへ船中にて不養生のため移民局に停留の宣告を受くる者多しと聞く。

扨て百餘名の婦人を見渡すに、田舍の老婆數名、博覽會のため都踊の京妓の一行に、小さき丸髷の踊の師匠と髮結女、中年の藝者、敎育ありげの婦人と子供、再渡航者、寫眞結婚者、既婚者、是等の大多數は無敎育の女子にして、田舍育ちなり。廣島、福岡熊本、和歌山縣人が八分までと見てよろし。何處に行きても日本人の多き處は以上の四縣と滋賀、愛知靜岡縣が大勢にして、特に寫眞結婚の女は此等縣下の田舍者多く、小學校さへ卒業せぬ程度なり。尤もシャトル附近は普通敎育ある女子多しと云へども、加州の農家に嫁するものは、無敎育の女多しと云ふも過言にてはあらじ。次に服裝を見るに大概は日本服に袴、中には始めての袴に候と廣告せぬばかりの姿あり。又日本の下手な田舍洋服師の仕立てし肩巾を狹くせし看護婦用の如き洋服を着せるあり。裾模樣の似合はぬあり。舞妓は今にも上陸出來るものと思ひてか、紫の友禪縮緬に桃色と黃との重ねを裾にみせ、緋の帶を文庫に〆めて髮は京髷に簪花櫛と御所車の如くに飾立て、踊忘れじの心掛にや、妙な手付きを鼻唄に合せば、其を美し氣に打眺むる田舍娘子靴で足がむけたと澁面作るを、「これ見な俺は下駄や」と五十七才の紀州の老婆が日に燒けし脛もあらはに煎餅の如き下駄をみするなど芝居の如し。米國にては束髮に大な毛の心を入るは既に廢れたるを日本姉妹は今も尙額より高く前髮を出し、短き毛の前後に亂れ下るを其儘になし、顏には斑や厚く白粉を塗りしが、如何にも米人には異樣に、且不潔に見るとか、注意を要する點多し。

鐘の鳴りしは晝飯の報知、日本人の隣室なる支那婦人も、其隣なるスペイン人、メリシヨ人も皆一所に下部なる食堂に行く、六間に四間程なる此部屋に長き卓二脚づゝ八列に竝び、ベンチに腰かけて食事

す。扨て卓上には大な皿の洗ふ如きペンに食パン山の如く積みしが此處彼處にあり。茶椀に、白砂糖とジャムあり、其他には茶と茶椀の外無一物なれ共、白人等には肉、豆、食器さへ少しく上等のものが用ひられゐたりき。日本人中にも金を拂ひて一品二品取り寄せしものもあるなれども、此は數人のみ。五分間も經ぬ中に食事濟みて皆二階に昇り行く、途中小な食品の店に立よりて福神漬、菓子等我勝ちに買ふも無理なし。夕飯は四時にて支那米、副食は菜と豚の小片との鹽味したる汁、茶にしてパンの欲しき者は求むるを得、朝食も夜食と同様なり。涙ぐむ者多きを見たりき。船會社は一人幾何として食料を米國政府に拂ひ、政府は入札にて請負賄に一任するものにして、請負師は勿論白人にて、料理人は多く支那人を使ひ、支那人の移民を標準として如斯粗食をなさしむるものとぞ。食堂に四個の小き左の掲示を見たり。

特示

如有食物不佳或飯菜不足抑或服不安宜即刻報餐房内看守人知若當時不服後來始報關不理。

本關總理特示

食物不良又は不足或は取扱ひ不行屆の事ある時は直ちに食堂管理人に申出らるべし、但後に至りて申出るも一切之を受附けず。　移民局

形式も斯迄に至りては寧ろ滑稽と云ふべし。夕食は舎監に伴はれて外出して海の景色を眺め、山の方にも行きて運動す、鐵柵にて後部は圍まれ常に數人の看守諸所に出沒して薄氣味惡し。一人の婦人海を眺めつゝ「一體爰は何と云ふ所でやす」「天使島と云ひます」「エンジルとうですか、エンジルとうにやられる〳〵と人さんが云ははつたがほんまにきてやな」紀州のお婆さんは天國にでも來た如き感に打たれ「こんな綺麗な處に來たのも全く伜のお蔭や」と物語る美しさ。「お婆さんは亭主は？」「御亭主はもうないわな」「お子さんでも米國ですか」「ハーお子さんも孫さんもアメリカにあるので來たのや、村の衆が

「行くのはゑらいぞ、大切にしていきよし」といふてくれてな……」

男子の棟の金網窓から支那人が狂氣の如くに吽んで女達を調戯氣味惡るさ、看守のよくも默許し居るが不思議なり。七時頃とも覺ゆる頃に又内部に入りて風呂に入り就床の仕度を一同に舍監は命じたりき此處の婦人舍監は二名にして一人は米人、一人は美以教會牧師寺澤氏の令夫人なり。夫人は英語も流暢にして、同情に富み且數人の立派なる子女の母君に在ますを以て此上もなき適任者なり。支那語も語らるゝが爲に非常に好都合、支那人は夫人をマヽくと呼び敬慕するは夫人の徳の然らしむる處なるべし夫人の厚意にて我は一泊を許可されたるは嬉しき限りなりき。翌朝は前日の檢査の合格如何を問ふもの何時自分の檢査の番にやと、氣を揉む者等の神經を幾分なりとも鎭めんとて、米國の事を一同に語り出でぬ。

一、西洋の一般風俗。
一、女の特に注意すべき點。
一、風呂場、便所。
一、髮、爪、帽子、靴、ハンカチーフ。
一、話辭、歩方、禮の仕方。
一、渡米の心得、誘惑に勝つ道、同胞の意味、米國の家庭。
一、米人の嫌ふ點、好む點。

一時間餘も語る中に船の時間の來たりしかば、何時迄も止まるを得ざる身とて名殘は盡きねど急ぎ下に下れば控室には親、夫などの迎へ人充滿せり。船の岸をはなるゝ時に窓よりのハンカチーフは抑も誰の挨拶にや。

河井總幹事來信

●●●●●六月十七日、只今羅府の女子青年會で人を待つ間に一筆書き出しませう。東京にも此秋から會館が出來て、人々が友人を待つ間圖書室にでも行き手紙をかく事の出來る樣になるかとおもへば嬉しくてなり

ません、さて私は四月十九日に桑港に上陸後一週間丈同市にて四方に走り廻り南部の羅府に參りまして飛び廻り次には又北部の桑港へゆき六月五日に又も羅府に引返しました。今度は明後日(十九日)此地を去り桑港を經てシアトル市に行きます處でありります旅行は平氣の私でも餘りいそ〱數此處彼處と小包の樣に送られてのみ居るは目のまわるものです、やれ〱最早迎の人が來ましたので何もかけません止筆します。日本の姉妹方の上に祝福あれよと祈るが私の第一の願であります。皆樣方の御祈ゆゑに私は元氣で無事である事が出來ます。

●●●廿一日、シアトルの途中滊車にて。少しも手紙などかく時が今までありませんでした。十九日羅府を朝早く數名の姉妹に送られて立ちました。其内の馬場夫人は該市日本女子靑年會の會長で、長崎活水女學校出身、赤穗千春姉は東京女子高等師範、狩野わか子姉は普連土女學校、今回幹事として渡來なされし大谷ろく氏は捜眞女學校出身で、かく諸學校の方々が一寸のグループにもある事は嬉しい事ではありませんか。羅府では大谷ろく子姉が幹事として御越しになりしため大元氣がつき、委員が一生懸命になつて會の維持のために御奔走で御座います。十八日の夜の如きは、私が時間のなきため九時より委員の有志家で送別會をして下さいまして十一時半頃に散會でした。處が御主人方が、十二時頃に電話をかけられて大層御心配らしいので、かく夜更けに迄も會などする女子靑年會ならば出席は今後するなと御叱はなかりしかと夜中按じて居ました。兎も角諸姉があらゆる厚意を以て私のために御盡力下されし事は感謝に堪へません。羅府には今より一ケ年ミス、タピングに止まり貰ふ事となりましたから事業上にも精神上にも偉大なる進歩をすると信じて居ります。皆も大悅びであります。又大谷姉の働き振が甲斐々々しいので滿足をして居ります。

十九日の午前十時にヲクスナドと申す赤大根の產地に立ちよりました。此處は日本人の風紀の宜敷な

い處と評判さへ立つて居る土地でありますが、小數でも信者の人々が力は合せて奮戰して居られます。此地の馬場牧師は前年風紀矯正に命を賭として戰はれ先生の力に依りて支那人の賭博所九軒を閉鎖させて多くの日本男子(或は女子も)此罪惡より救助されたとの快事があります、是のためには先生はピストルを持つて脅迫されし事幾度か數知れず、某信者の如きは先生は殺されしにては無きかと心配して早朝御住居を覗きに行きしとかでこれを以ても其戰爭の激烈なりしかを想像されます。一體日本勞働者は最初の程は歡迎されし程なりしも一段所謂布哇風の吹いてより即ち布哇轉航者が船毎に數百人と渡米して併も婦人は素足で日本服の前さへ搔廣げ脛も顯に髮は亂れ子供は純然たる日本田舍式加之目に一丁字さへなき男子の大和魂如きはもぬけの殼で唯々黄金慾の化身とも見るべき輩の大多數を占め居りし其結果として日本人排斥の聲高くなりしと行先々にて耳にする處です、尤も轉航者中にも立派な人もありしならむもこは指を屈するに過ぎざりしもの丶如く思惟されます。勿論排日の背後には樣々の原因あるは瞭然たる事なれども今述べし如き勞働者の一度に多く渡米せしが米人をして顰蹙せしむる樣になつたと申します且又賭博も布哇よりの轉航者中に盛んであり此惡風を在米同胞等に傳播した由で聞くまゝを述べて置きます、目下此賭博の盛な處では婦人もいたしますので大抵の日本人の娛樂場としての玉突場や料理屋の奧座敷は賭博の席で相手は支那人が重であります。そこで此支那人は組合をなして日本勞働者の集る處には必らず此惡所を設けて日本人より卷上げる金額は幾千幾萬弗になるとかであるとは如何にも殘念な悲しむべき事ではありませんか。米國の政府は支那人日本人などの居留地は寬視して居るといへばよくきこえますが實際は無關係として別に制裁を加へず懲戒もせぬといふ有樣であるがために色々の罪惡が公然と行れる次第であります。如斯と聞けば聞くに從ひ御互に同胞を救濟する道を講じ高貴なる

犧牲を拂ひても努力をせねばならぬと思ひます、幸
にも眞個に救に入りキリストを救主として信じ救は
れし信者が、一人でも二人でも各地に散在して偉大
なることを志し且つ微力ながらも正義に向ひて進み
つゝあるは感謝に堪へぬ處で聖書にある芥種を連想
させられます。今は日本婦人の事に付見聞した事を
記載する時間がありませんが後日必ず致しませう。
　此手紙を書きかけてより數日を經て居ります。今
は六月廿四日午後七時半で丁度集會場にて講話が
ありますが明日の便船に是非とも間に合せんと思ひ
欠席してこれをかき終んとしてゐます。抑も私はシ
ベクとてシアトル市より小蒸滊にて五時間かゝる山
高く水清き仙境に女子青年會の修養會のために來て
居ります。合衆國西北の四州女子青年會の代表者が
集りました。數に於ては二百人でありますが、代表
して居る地方を申せば優に日本を二倍して居ります
こゝに到着したのは、廿二日の午後二時であります、
途中廿日に桑港に面して居るオクランド市にてベ
イチ幹事に逢ひ次の列車を待つ間三時間といふもの
は御互に東京の事を語りつゞけて恰も數ヶ年も相見
ざるが如き樣子で他より見なば嘸かし狂氣じみたと
後になつて氣付きました。東京女子青年會の新建築
から今度の總會、新らしき委員の選擧、旅行者の友
の働き、好友園の擴張、寄宿舍の情況、いづれも諸
姉の忠實に活動さるゝを聽きて只々感謝に堪へま
せん。今度の夏季修養會委員が皆々多忙の方々にも
拘らず、熱心に御盡力下され其のために歷々の諸講
師を得られ萬事好都合とは何たる喜びか筆紙に盡さ
れません。遙の空にて會の上に祝福のある樣、委員
代表者諸姉のために祈ります、大津の樣子いかで忘
れる事が出來ませう。諸姉本年は各自が責任を持た
れて實に今までになき有効なる修養會となされ度く
眞心より御願致します。來年の夏は富士の麓で共に
神を讃美いたすとおもひ雀躍として居ります。
　こゝの修養會は昨日を以て開始され七月三日ま
で御座います。私は日本のミション、スタデを擔任

せさせられ其準備をいたすに時間がなくて大閉口で御座います、併し大平洋沿岸に排日熱の盛んなる今日、いかにもして基督者に日本の事を談るが第一の得策でありますから力の限り試んと存じ參考書を急に集めてやつて居ります。「我等は責任を果し結果は神に全任す」との金言を貴ぶは私のみではありますまい。

爰に日本からの方は姫路の日の本女學校の先生たりしラムジ女史と向井敬子と申さるゝ香川縣からの方のみであります。御兩人とも最早今夜十時の船でシアトルに御歸とは名殘惜しく思ひますが又同市で再會を期して居ります。

夕方の美しい事、桑港からは九百哩も北方ですから薄暮も永く八時半頃までは人影も鮮かに見えます。水の眞際に中央の館があり其前なる十間計の橋を渡りて細き砂路に至れば又水際に小き集會堂が水に影を寫して居ります。其向なる二町餘りの水面の彼岸には杉松の雜木が鬱蒼と空を摩して居ります。其背後には山又山の屛風姿は日本でも稀に見る絶景であります。今々向ふの集會堂での聲が靜けき夕べの空にひゞいて居ります。あら！蛙が何處ともなく鳴き出しました。青田の見えぬが不思議の樣であります。來る七月廿四日には加藤高子姉が愈々日本向けて出發です。二ケ年の御勉學の功ありて幹事養成所にて卒業の榮譽を得られしを諸姉も喜んで下さいませう。秋からは東京の青年會で働かれます。同船で植村先生の二女にてゐます植村環姉も今回ウエルスレー大學を目出度卒業されて御歸朝になります。萬々歳ではありませんか。

八月廿五日にはミス、エマルソンとて二年以前ウエルスレーを卒業されて其後女子青年會に從事されし方が日本に行かれます。同女史は日本語を御勉學後は私共の青年會の爲に幹事とならるゝ候補者であります。此方は今此修養會に御出席で暇毎には御目にかゝり日本の事をお話し申して居ます。

七月卅日、明日のマンチユリヤ號で、是非とも日本の姉妹方に私の消息を傳へたく、心に浮ぶ儘を書き並べます。

去る日北部の方から又桑港への歸途櫻府に二日滯在して蒸殺される程の暑氣を感じ、廿日の午後五時の桑港行き列車に乘込みました。實は東部から加藤高子樣が確に此列車と信じ込んでそれを待受けたのです。勢よく停車場に入り來りし長い〳〵滊車を此處彼處と見渡し、黒坊さんに尋ねると一人日本人が居るとの事で是ぞ加藤さんと飛行かんとするに男子ですと附加されて、氣拔し其中に發車であるし詮方なしと二時間を獨り不平の中に車中で送りました。愈桑港と云ふ場所は誰しも小蒸滊の渡船に廿分計乘らねばなりません、確に此の中には見付る事と、人より逸早く前の方にと乘客のよく見ゆる場所に在つて四方を見詰居ると、黒帽に桃色の一輪をかざした元氣よき步調の御方こそ其人と見て取り、傍にゆき名を呼べば只呆然と口を開き『あら先生』との挨拶それより御互に傍若無人に喃々と咄し出し止め樣もなき計りでした。御互に大なスートケイスをぶら下げてウン〳〵と云ひつゝ桑港なる日本女子青年會館に着き重荷を下したのは夜の十時過ぎ、山なす物語も逢へば却て語るも物憂く旅行疲を休めん方賢と其夜は就床しました、翌日は博覽會やら訪問やらで其翌日は植村環樣が御到着で大賑になり、又博覽會と日本料理の御馳走を宮崎牧師の御宅で頂戴御相伴をいたしました。廿四日は御二人の御出立で朝から來客やら荷造やら中々に騷がしいが植村さんは父君の泰然たる御氣質を受繼がれ、早朝切符や小包の用事があるとて十一時頃まで御留守である中に既に同姉見送りの方々が御光來になり、御歸を待受けでした。船は中々大勢の乘客らしく、相變らず出發以前の大騷動が甲板に演じられつゝある中を二人は花やら小包やら手提やらで、欣然として見送人と御咄しでしたが、午後一時に大船は靜々岸を離れて、十七日間の航海を始め出し甲板と岸とでハンカチフの活

動は何處の港も同じ事であります。翌廿五日天洋丸が入港で東洋汽船會社々長淺野總一郎氏同令夫人同令嬢御二人と海老名彈正氏同令夫人と御渡來なれば、埠頭に御出迎をいたしました御一同御機嫌よく御見受け致しました。普連士女學校の先生で青年會の委員の一人なる、ミス、エリス、神戸女學院のミスストー御姉妹、昔のミス、フイシャー、只今支那に働かるゝバーヂス夫人等、意外の方々も御同船でありしたために御目に懸り得ました。

女子青年會々員は御存知の通り、淺野氏は東京女子青年會々舘のため先年壹千圓を寄附され、桑港の青年會のためにも御同情下されし事あり、又令夫人は東京女子青年會副會長、今西糸子夫人の御友人なるがため明日は此處の女子青年會で歡迎會を致します。又海老名先生の御渡米は在米同胞間の啓發運動のため加州の日本人會より御招待申上たのであり同令夫人が御同行されしは、一般の者の大喜びであります、明日は同夫人の歡迎會をも此處で兼ねて致たしますため委員等は大層御奔走であります。淺野御令嬢方は紐育に三年間御留學成されるとのことで、御兩人とも基督敎に注意されて將來は眞面目な事のために御盡力になる御芳志と承り、御兩人の祝福を祈ります。讀者も御兩人が米國の偉大なる處に着目され、高潔なる敬神の念深く獻身の實を擧げつゝある人格に多く接せらるゝ樣に御祈り下さいまし

扨て桑港の日本女子青年會を御紹介申上げます是は今より三年以前に創立されて會員は三種に分れてゐます。會長、其他の役員、外に十五名の評議員で全部を統理する事になつて居ります。會員數は百餘人ありハホス夫人と申すのが幹事であります、財政は全く獨立であり委員等は中々御苦心であります。會舘として一軒を借り、二階は七人程の寄宿が出來き下は樣々の組や集會に使用されます、此處に寄宿する者は未婚者で何か稽古の爲に田舍から桑港へ出て來た女子、良人が留守中に裁縫等を習ふ婦人、奉公や店に行く婦女、或は旅行者等でありますが、食

事の備は爰になく自炊か又は他にてする様になつてゐますが、是は目下良法を考究中であります。組は英語、洋服、帽子の教授で人數は一定して居ません爰に困難なる事は習ふ婦人が色々の都合にて永續しない事で常に人員が變つてゆく事であります。從つて教へる人々も興味を持つのが六ケ敷のであります幹事ハホス夫人は昔金澤市に久しく傳道をされし方で今良人は當地の移民局の官吏であります處から、當女子青年會の幹事は移民局に自由に出入する許可を得て、船の入港毎に天使島の移民局や其病院を訪問して慰籍し或は英語を教へ、又は地方に行く者に紹介狀を與へたり、桑港の青年會を教へたりして居られます。又寫眞結婚で來た婦人達は移民局の規則で上陸前夫たるべき人と牧師或は佛教の教誨師の許に結婚式を擧げなければならぬが此席では他人を許可せずとも、女子青年會の幹事は特權を與へられて居ます。此式は若し本人同志が特に基督教で又は佛教で擧式したいと願へば、それは其として、普通は只頭割に三分の二は牧師、三分の一は教誨師が司るとの規定である由。橫濱女子青年會が發行した渡米心得の一層平易な小冊子を當地で印刷して、天使島に居る婦人に配付せんと當會は協議中で其草稿を私に一任されました。畢竟此青年會は渡米する婦人を指教して、在米同胞の向上發展を圖るに外ありません。追々宗教の分子を强めんとして努力さるゝは喜ぶべきであります。爰に第一必要なるは日本婦人の責任幹事を置くことであります。信仰を基礎として献身的に同胞を愛し教へ、米國人の間にも交際し得て日米の親善を實現せしむる日本婦人であります此處のみならず何處にても斯る婦人がなくては在米同胞の問題は解決が遲々たるものであります。姉妹達よ、御自重なされて日本にて充分に教育を受け信仰を養ひ、將來神の御意ならば、在米同胞姉妹の僕となりて献身されんを願ひます。

第十回夏期修養會感想

（一）

函館　平岡けい子

蝦夷ヶ島から大津までの旅は長う御座いました、殊に暑さが厳しう御座いましたので、横須賀ステーションにつきました時は身は綿の様に疲れて居りましたが第一のプログラムの開會式の時間に少し遅れる様に思ひましたので車夫に特に早く走つて貰ひましたが、大津勝男館に着きました時は定めの時間より三十分おくれて七時半で御座いました。打寄する波の音に和して、もれてくる讃美歌をきゝ、數知れぬ下駄や靴の奇麗に並んで居りますのを見ました時「おくれた」と今まの樣の心の中で叫びました。おくれ馳せながら開會式につらなる事が出來まして嬉しう御座いました。皆樣の望みに充ちた御顔、希望は第一の開會式にみなぎつて居る空氣で御座いました、修養會で得ました賜物は數々ある事で御座いますが一口に申上げますと二十一日の夕の開會式は望みに充ちた式で御座いまして二十八日の夕の送別會は感謝に充ちた會であつたと思ひます、希望をもつて出席致しました聖書の組講演會協議會は凡て感謝の祈りの内に閉ざゝれました。送別會の時に星野先生はいろ／＼の方々から色々の方面の御話を伺いましたがどなたの御話にも一つの同じ思想が一貫してをりました。と申されましたが私もさう思ひました、そして廣間の鴨居の處に張りめぐらした白布にかゝれてあつた「エホバを俟望むものは新なる力を得ん又鷲の如く翼をはりて上らん、走れ共疲れず歩め共倦まざるべし」と「我兄弟よ主及び其大いなる力に賴りて剛健なるべし」との二つの聖句の中の「いかにしてエホバを俟望むべきか」と「いかに大なる力に　るべきか」なども御話の内にも敎へられた敎へであつたと思います、修養會に出席遊ばした百四五十人の姉妹が各々得られました賜物で、それ／＼疲れず倦まず剛健に主の御國に御活動遊ばす事と思ふさへ活々とします。協議會で色々と他の支部の御活動振りを伺ふ事が出來ましたのは互に學び益する所少なくなかつたと存じます。昨年の修養會にはもつと各支部の内容を互に知る樣に致し度いと役員の方々が役員會の時申して居られましたが誠に結構な事と存じます。短い日限の内に開かれます修養會講習會の種類は集會や講演が多過ぎる傾きがあり易いものでございますが此度の修養會は少しも多過ぎると思ひませんでした、それかと申しまして夏の長い日を持て餘す程少なくもありませんでした、學ぶ時も、姉妹と親しむ時も、美しい自然に包まれて運動する時も極適當な時に適當な丈御座いましたのは役員の方々の御考へ深い御注意の然らしむる處と感謝致して居ります。益々女子青年會修養會の盛大ならん事を祈りをして筆をとめます。

（二）

東京　袖山あい

樂しかつた修養會が終りましてからはや一月餘りとなりました、あの涼しい大廣間で心を一にして御祈りを致しましたのも昨日の樣に思はれまして思ひ出はそれからそれへと繰り返へされます。

この會が始めて開かれましてから早や一昔の星霜が過ぎましたと承ります、不幸にして只今まで一回も出席するの御惠をうけませんてした私は御出席遊ばされた皆樣のお歸りになつてからのお話を承り定めて有益なる會であらうとは思つて居りましたが、これほどだ

とは思ひもつきませんでした、この度幸にして出席が出來まして誠に有益な事は皆様の御話以上であるとつく〴〵感じました、これも一重に神様の御導であらふと深く感謝致して居る次第であります。

どなたでも始めて受けた印象は强いものだと承りますが私の如きものでも始めて出席致しました事故人並に感じました事が色々御座います、自分程くだらない者はないと自分で自分に愛想をつかして居りました私は假令少しの感じた事がありましても人様の前で御感話だの御勸めなど致します事は出來も致しませんし、また嗚呼がましい事だと深く思つて居りましたから、これまで決して斯樣な事は致した事が御座いませんでした、然し此度は思ふこと云はざるは腹ふくるゝ心地すと申しますし、また自分　非常なお惠を受けて置いて、これは人に語るべき事だと信じながら骨惜みをして人にも告げずその惠を一人占めにして神の御榮を暗に葬むつてしまふのは餘り我まゝな事で神の御旨にかなはぬ事だと信じますから少しばかり述べさして戴く事に致しました。

先づ第一に感じました事は皆望がお互に何學校この學校といふ樣な他人行儀な垣根が除れまして、一人の父樣から生れた誠の姉妹の樣に睦じ親しんで居られた事であります、これは神につける姉妹方の今更珍らしくもない事ではありますがまた神を知らぬ他の人達の他の會合には見られぬ光景であります。私の樣に始めて參りましたものはおなじみも少なく大方は始めてお目に懸つた方々でありましたのに皆樣が御親切にして下さいましたので、今まで知らなかつた人が一時間も立たない中に十年の親友の樣になりました同じ主義同じ目的の下に立つて居ります私共は丁度同じ幹に連なつて居る多くの小枝の樣にお互にはなれる事の出來ない關係を持つて居るものだと感じました。

ある先生は此度の修養會は Wondeful Conference と仰せられましたがほんとうにさうであつた樣に思ひます。河井先生も御出にならず又マクドナルド先生も御留守中でしたので幹事の先生方がお骨折下さいました事は私共の深く感謝致して居る處で御座います、只に幹事の先生方のみならず方々の學校の方々が御自分の會だといふ氣におなりになつて皆その責任を各おつくし遊ばされたのもこの大成功の原因であらうと思ひます、早天祈禱會のあります時には朝は五時半から始まりまして一日中多い時には七八回もお集りに出席致しまして、或る時は海に入るさへ面倒だと思つた位いであります、いつもならば「かう御集りばかり續いては飽き〳〵する食傷して仕舞ふ」など勿體ない事をいふ處でありましたが私は食傷處かこれでもまだ足りない樣に思ひまして隙さへあれば聖書を見るなり御祈りを致しますなりして居りました事はこれまでとくらべてほんとうに自分ながら不思議な樣に感じた位いでした、いつもならお互に集まつて、むだ話でもするだらうと思はれる樣なFree hourにも神をほめる讃美の聲は天上の音樂もかくやとばかりの波の音に和してはるかに聞えてまゐります、さゝやかなる御祈の聲もそこゝらの部屋からかすかに聞えてきます、常には字引と首引をしたり机に牡蠣の樣にかぢり付て、あくせくと暮して居りまして一日に一時間と雖此世からはなれるに難かつた私はあの美しい自然に接しながら尊き神の御教に全く俗念をはなれて暮した一週間は今思つても氣持がよく身も心もすが〳〵しく思はれます、全く神の御導きとしか思へませぬ。

皆樣の御骨折につきまして、例へば日曜學校の如き、日曜のみな

らず毎夕子供は大數集まつてまゐりまして、姉妹方の御懇切なお敎へをきいて居りました歌も直におぼえて、時々濱の方で敎へられた歌を唱へて居るのに思はず耳を傾けるので御座いました、女中の集りも昨年一度開かれたとかで本年もどうぞ開いて呉れと先方から申出られまして、私共及ばずながら少しばかりお話しを致しました。朝から晩まで立ち通しに働いて居ります女中達の事ですから少しても用のあい間には氷でも飲んでたばこの一本もすい寢ころんで馬鹿話しでもする處を臺縦もしないで私共の樣な足らぬもの丶申す事にでも耳をかたむけ樣と望む程でありますから、先方が熱心なのは申すまでもありませぬ、午後は三時から三十分間と極めてありましてもそれからそれへと質問が出まして、四時半位にもなつてしまふ時もありました、また夜分も皆が臺所の片付がすんで仕舞つてから十時の消燈後三十分と極めてありますのに、十二時頃までも海岸でいろ〳〵お祈をしたりお話を致しましたりして他に得られぬ聖い時を持ちました、私は實に先方の熱心なのに驚きましたそして「田はみな色づきて刈鎌をまてり」といふ句をつく〴〵と思ひました、私の今まで何も神の御用に立つものであるとは思つて居りませんでしたが、この度の事に依りまして私の樣なつまらぬものでも神樣はお使ひ下さらふとして居らる丶といふ深い自信を得ました、それと同時にウカ〳〵しては居られぬといふ心もおこりました、自分で自分をすて丶居た私は神によつて捨てられなかつたのを見出して有かだくもまた恐ろしく感じました、ペテロは何も敎育のない漁夫でありましたがキリストに依つてあの樣な立派な働きを致しました、私共もそれと同樣に、自ら一個としてはほんとうにつまらぬ小さな取るに足らぬものでありましても、もしも神から撰ばれてお力を給はります時には今までと異なつたものとなつて、思ひも及ばぬ立派な人になり如何なる事でも出來る樣になると信じます、又隨分立派な賢い人でももしも神の御力を賴らずに己の力で何事でもなさんとする時には何一つ神の御心を喜ばす事は出來るものでないといふ事をつく〴〵と感じました、私共の造り主なる只一つの神を知りてこれを信ずるは丁度自分の父を知りてこの人が愛して居て下さるといふ事を信ずるのと同樣で不思議な事でも何でもなく當然の事でまた出來る丈けの力を盡してこの父を喜ばせる樣につとむるは決して立派な事でも何でもなく當然の事ではありますまいか、出來るとか出來ないとか云ふ事は育て丶呉れる親の知つて居る事で、出來ない事をさせ樣とする親もありますまい、それを自分で出來ないと尻込みをして居て只骨惜みをして居るのは決して謙遜でも何でもありませぬ怠惰なのだと思ひます、私共は何もかも父なる神に任かせて、これを賴り自我を出さないでこれに從つて此世を送りたいと思ひます、勝男館の女中達には聖書が欲しいと申されましたから東京へ歸りますと直に買つて送りました、私は毎日私共の蒔きましたつまらぬ種が芽を出し花を開き六十倍百倍の實がなる樣に祈つて居ります、どうぞみな樣も誘惑の多い社會に居る姉妹方の爲め安全なる道に進む樣にお祈の端にお加へ下さいます樣にお願ひ致します。

夏夕

辻村靖子

○ぬれえんに半さし入りて梧桐の葉こしの月のいろの蒼きかな

●第十回夏期修養會

日本基督教女子青年會主催第十回夏季修養會は豫定の通り、去る七月二十一日午後七時より、例年の如く神奈川縣浦賀町大津の海濱勝男舘に於て開會致しました、委員は前日より會場に出向して種々準備をなし置き來會者を待ち受けて居りましたが、當日の午後に至りて威勢よく車を連ねて來會せられた姉妹方陸續して、御出迎ひ致す委員達が大狼狽を致すと云ふ有樣でありました。開會時迄の申込受付數は百三十を算しました。

▲開會式　二十一日午後七時より開會式を行ふ修養會委員長星野愛子姉司會、讃美祈禱の後中央委員長井深花子夫人の歡迎の辭があり次ぎて星野愛子姉の報告及來會者への注意等ありて式を終り、一同歡喜と希望に充たされて、修養會の第一歩を始めました。

▲講演　翌二十二日よりは豫定のプログラムに從ひ每日聖書の組、講演等がありました（其演題氏名は前號に記載せしを以て略す）プログラムにはありませんでしたが、ミス、デフオレストの『宗教と音樂』と云ふ題の下に、又長らく印度女子青年會幹事たりしミス、テーラーの印度に關しての有益なる、興味深き、御講話がありました。例年この講演聖書の組は來會者に多大の靈感を與へて居りますが今年は何れの敎師講師方の講演も殊に著しく聖靈にみちあふれて、力強く私共の靈魂の奧底まで徹し、眞にキリスト御自身の御言葉である事を感じ、消滅しかけて居た信仰の火も再び熾に燃え上がりしを覺えました。

▲聖書の組　昨年のこの聖書の組では未曾有の効果を擧げたと思つて喜んで居りましたが、今年は尚昨年にも優つてをる事を思ひ感謝に不堪次第であります。組別は四組でありましたが、何れも平均三十名の出席者は規則正しく出席し、殊に其研究すべ

き題目が默示錄、或は以賽亞書等。獨學では到底其意味を解し難く、是等につきての講義を聽く事又至難なるがため、生徒一同非常の興味と熱心をもつて研究し、これまで味ひ得なかつた眞理を味ひ、大いに信仰の警醒をあたへられました、求道者の組は今年も又外村義郎先生に御擔任を御願ひ致しました。御熱心なる御盡力により未信者八名中、六名の决心者を出す事を得て感謝いたして居ります。

▲親睦會と特別會　二十三日午後二時より親睦會を開き、會場女中等のため毎日聖書の組を、又近隣の小供等のため日曜學校を開きましたが、何れも非常な好結果で御座いました。

▲協議會　第一回協議會は二十二日午後七時より開き先づ小此木松子姉本部の諸事業につきて報告し、且大正四年度の報告書を配布しました。後各支部の代表者、三分間を限りて各自青年會の特に興味あり、且、他の支部の參考ともなるべき働きに就ての報告を致しました。第二回協議會は二十四日午後七時からで、社交部、聖書研究部、會計部、傳道部の五つに分ち、各司會者を定め、異つた御部屋で開きました來會者はこの何れかに出席し、各支部代表者の各報告に次ぎて、司會者參考となるべき數項を提供致しました、但會計部のみは支部の會計若しくは會長が出席致しました、司令者は社交部ミスチャペル、聖書研究部ミスヒリップス、會員部渡邊喜美野、傳道部松本松枝、會計部河口正子、でありました。

▲早天祈禱會と夕陽會　ほのぼのと昇る朝日の美しきあしたに開かれました四回の早天祈禱會と其西の方に餘光を殘しながら夕日の沈む時に致しました二回の夕陽會とからは、來會者一同も少なからずのインスピレーションを受けたことで御座いませう。早天祈禱會の方へは比較的出席者少なく平均五十名位でした。然し夕陽會の方へは殆ど全來會者が出席した樣で御座いました。支部からの姉妹方が交る〱執心に司會せられ、各會とも定りたる主意

を覺えて三十分乃至四十分間神の前に出でたので御座います。先生方の結構な御話を承つた事は勿論有益な事で御座いましたが、靜かに心を同じうして神の前に出で各自等の受けし惠について心よりの感謝を捧げ、又靈の力を受ける爲あの様に熱心に祈ることの出來たのは、修養會の目的の一部が遂げられたと申すことが出來ませう。其司會者と主意は、

		司會者	祈禱の主意
二十二日	早天祈禱會	高田　輝代	修養會のため
二十三日	夕陽會	渡邊喜美野	求道者のため
二十四日	早天祈禱會	高村　いく	安息日　迎ふる備
二十六日	早天祈禱會	重濱　とし	標語にもとづきて
二十七日	夕陽會	熊澤うしゑ	各支部の爲
二十八日	早天祈禱會	松本　松枝	感謝及今後の決心の爲

▲**閉會**　神の鴻大なる御惠の内に抱かれて互ひにむづひ合ひ、永遠聖き樂しき思ひ出となるべき一週間は過ぎて二十八日の夜、閉會を兼ね送別會を擧げました。司會者星野愛子姉の所感に續づき、一同感謝と聖靈にあふれて受けし御惠の證をなし或は其決心を發表し、又は感謝の祈禱をもつて時間の短かきをかこちたい程でありました、滿場悉く靈のバプテスマ受け、其の顔は皆輝いつて居つたのを感じました。翌二十九日は早朝起き出で、大津の海濱に別を告げ、互ひに名殘りを惜しみ、後髪引かるゝ思ひを以て各家路につきました。

●書簡と電報

今回の第十回夏期修養會に對し在米河井總幹事其他諸氏より懇切なる書翰又は電報を寄せられしが、即ち左の如し。

今日は七月一日にて合衆國西北部女子青年會の修養會開期中に御座候、場所はシアトル市より四十餘哩隔り候シーベックと申し風景明眉なる土地にて水泳も自由、野花摘も思ひのまゝ、加之櫻果も自由に樹の下で戴ける仙境に御座候、朝夕の涼しさ日本の五月頃に御座候、來會者は二百餘名にて、何れを見ても眞の生氣の滿々たる笑顔のみに候、斯る青年女子を見るにつけても故國なる姉妹

方を思ひ出で候、何卒今年も昨年にいや増して我が修養會より好結果の生ぜん事を祈り申上候、明年は御一所と今より樂しみ居り候、『キリストの道をして汝等の心を敢て充足しめ諸の智惠により詩と歌と靈に感じて作れる賦とを以て互に相敎へ相勸め恩に感じて心の中に神を讃美すべし、汝等の爲す所の諸事或ひは言あるひは行みな主イエスの名の爲に之をなし彼に由て父なる神に感謝すべし』(コロサイ書三章、十六、十七)の二節の句を祝辭に代へて差上度候。

在米　河井道子

遥かに故國に於ける我が基督敎女子青年會夏季修養會を偲びて天父の御指導のもとに御成功を祈り上候。北米東部に居る日本女學生の中、私共拾一名は去る六月廿六日より七月五日まで、ペンシルバニヤ州イグルスミーヤに於て開かれ候女子青年會修養會の御招きにあづかりて出席致し共に學び共に語り樂しく信仰の道をたどり居り候。聖書研究、說敎講演などいろ〳〵有益なる事、數多く候、なかにも殊に研究會といふものを催して、我が國の家庭、女子の敎育、職業、かつは私共の責任、覺悟など相談致し居り候、こは私共ばかりの打ちとけたる會にて互に日頃の所感、意見など心措きなく語り合ひ共に勵まさるゝ事尠なからず候午后は親睦、遠足、水泳、餘興など時を忘れて興じ合ひ候。日本人代表者の中に以前青山女學院に敎鞭を採られしミス、ルエスの居らせられ、いろ〳〵御世話被下候こと誠に幸と存じ候。イグルスミーヤは山蒼く水清き所、美しき自然と溫き友情の間に諸學校より集りたる五百有餘の者が靈の糧を味ひ居り候、殊に日頃學校を異にし、相はなれて相見ざりし私共、かく一所に起き臥し致し居り候此の間は故國を偲ふことの切に御座候、委員講師をはじめ御出席の皆々樣の上に天父の恩惠、優渥ならん事を祈り上候。

北米ペンシルバニヤ州イグルスミーヤ
基督教女子青年會夏季修養會にて

エミー ルエス　山澤 時子
西野 貞子　渡邊 百合子
加藤 高子　植村 環子
佐藤 隆子　三浦 しげよ
上代 たの子　正田 淑子
平野 千惠子　須藤 家子

神様の豊かなる御惠みの下に愈々今夕より大なる希望に滿ち〳〵て、第十回夏季修養會が開かれ來會せられし多くの姉妹方が美しき景色を通じてよき御話を通じ、又大なる人格に接せられ、神の與へ給ふ數多の賜物を充分に御會得を遊さるゝ樣尙諸先生方の上に神の祝福の豊かならん事を遥かにお祈り申あげます。

島田 初子

尙以上の外祝電、書簡等を送られし方々の芳名を左に掲げて感謝に代ゆ。

陶山よね子姉　三田 花子姉　三田 靜子姉
婦人矯風會

●女中の集

「せめてもう五日も」と云つて惜がられた夏期修養會も多勢の姉妹方の上に多量の靈を注いて此後の働きに充分な原動力を與へて去られました、罪に染み汚れた身を七日の靈的修養でいくらかでも淸められたやうな心地が致しまして感謝に堪へません、神は「靈なれば」(約四〇二十四)とございますやうに愛の神樣は靈であると云ふ事を此度の修養會に參りまして一層強く感謝致すやうになりました。

私共主の小さい僕が宿の女中達と毎日午後三時から三時半の微寢時間を利用し致しまして、御集りを致しはじめましたのは三日目からで御座いました、九人の女中達が終日の疲れをも忘れて喜んで集まつて共に讚美歌を歌ひ、お祈し又主の御道を聞いてくれました、皆嬉し相にニコ〳〵して聞いて居りましたが、實は初めてゞわかつたかしらと心配致しました。折柄其の内の二人がお集り後こつそりと來て「今日の御話は大變に好い御敎へで御座いますが、どうぞもつと夜にでも其の御話をして下さいませんか」と熱心に云ふて吳れました、皆晝間働き續けて御座いますから、無理してもと思ひ有志の者を連れて海岸に出で、砂の上に坐つて靜かな集りを致しました段々わかつてくるとて、喜んで居りました。二日目の午後の御集りには皆がよくわかつたやうで御座いまして、一同が「よい御敎へで御座いますね」と感服して居りました。その夜又三人の女中と海岸に出て話し合ひました、隅なく冴え渡つた月は、隅なく照て居る神

の御光の一部を現はして居るやうに感ぜられて益々「御榮の爲に働かう」と決心を堅められました、「まあよくわかりました、それでは私共は今まで眞黒な中に慣れ染んで居つて、光を見なかつたやうなもので御座いますね、」と三人の女中は涙を出して神樣にお祈をし感謝を捧げました。「いよ〳〵三人は救はれましたね」と私共感謝と喜びで顏を見合せました時は既に彼等は神樣の愛に浴して顏まで輝いて居りました。神樣は「暗黒より光明へ」さまよつて居た彼等を送つて下さいました、その一瞬の間に於ての靈感の眞相に至りましては到底言葉に現はされないと存じます。實に彼等に知らせられましたのは、愛の神樣の內容の幾億萬分の一でありますかわかりません程の片影では御座いますが、それでも悅びが全身の脈管に躍つて居りました、翌朝は彼等の顏が輝いて見へました、其後他の女中達も愈々嬉んで御話をきゝ、中には時々暇を見て、先方から訪ねて參りまして御疑問を聞いたり、自分の境遇などを語つて主に救はれたい思など語つて短い間では御座いましたが信仰の世界に早く入らうと熱心になつて居りました。

「風は己がまゝに吹く……靈に依つて生るゝ者もかくの如し」（約三〇八）のやうに彼等が神を知りました事は、彼等の智識から來つたのでもなく、又推理でも想像でも御座いませんで、彼等は神樣を靈感しましたので御座います、神樣は御自身の愛を以て溫かい靈を彼等に下し給ひました。（せつ子）

●講師、教師、會員

今回の夏期修養會講師及敎師幷に會員、學校及出席者氏名左の如し。

▲講師及教師

今井　壽道氏　　横田　貞治氏　　外村　義郎氏
石原　謙氏　　鵜澤　聰明氏　　金森　通倫氏
星野　光多氏　　高野　重三氏　　柏井　園氏
山室　軍平氏　　ミス、テーラー

▲出席者數

總數　百八十三名（內臨時聽講者十七名）

▲學校

總數　三十四校

女子學院（東京）　　宮城女學校（仙臺）
井原高等女學校（岡山）　　尙絅女學校（仙臺）
共立女學校（橫濱）　　山梨英和女學校（甲府）
ウヰルミナ女學校（大阪）　　東洋英和女學校（東京）
遺愛女學校（函館）　　女子英學塾（東京）
北星女學校（札幌）　　神戶女學院（神戶）
尾道高等女學校（尾道）　　梅花幼稚保姆傳習所（上田）
梅花女學校（大阪）　　日本高等女學校（東京）
女子大學校（東京）　　同志社女學校（京都）
捜眞女學校（橫濱）　　フェリス女學校（橫濱）
プール女學校（大阪）　　弘前女學校（弘前）

青山女學院（東京）
共愛女學校（前橋）
女子美術學校（東京）
川越高等女學校（川越）
山脇高等女學校（東京）
仙臺高等女學校（仙臺）
金城女學校（名古屋）
廣島女學校（廣島）
東京女子高等師範學校（東京）
三輪田高等女學校（東京）
女子職業學校（東京）
御茶水高等女學校（東京）

▲出席者氏名

○女子學院　石塚みち　小篠端子
松川公枝　太田節子　辻たか
○井原高等女學校　藤浦初音
○宮城女學校　田中靜枝　原田ことち
鴫原とみ　木村とし　片桐八重
○尚絅女學校　中目松枝
○共立女學校　ミス、トレセイ　武笠みつ
原田壽子　伊藤つね　石川まさゑ
添田基子　荻野絹子　松本松枝
○山梨英和女學校　神子田とく　高木靜江
○ウキルミナ女學校　駒井喜代子　近藤まさ
熊澤うしゑ　深井八重子
○東洋英和女學校　宮長里子　山脇三重
中溝きく子　山本しげ　成瀨國子
重濱敏子　渡邊里枝　二階堂とみ
君塚しげ　内田勝代　ミス、チヤペル
加茂すが

○遺愛女學校　平岡けい　浦山みよ
○女子英學塾　石渡せつ　武安正子
田畑幸　本間あい　水野ひろ子
片岡民子　日高和歌　袖山あい
○北星女學校　阿由葉郁子
○神戸女學院　藤田とき　増井花江
渡邊喜美野　鹽見信　井口かつ
ミスコー　ミス、デフオレスト
○尾ノ道高等女學校　阪本花代
○梅花幼稚園保姆傳習所　上野梅香　高木千惠子
ミスポード　伊藤かね代
○梅花女學校　ミスマカーワン　小野澤江
山口靜子　安東庸子　澤村悠子
高田仲子
○日本高等女學校　河合はる
○日本女子大學校　ミスヒイリツプス　小口京子
松波綾子　松波絹子　小山順子
○同志社女學校　勝見千代　井深八重
長田たき　北川道子　富森
○捜眞女學校　中山旭　田丸はつ
青山みつ　高田輝代　秋野はな
○フエリス女學校　松永とも　椎野柳子
間宮美代　倉林悦子　鈴木ちか
渡邊不二　上野睦美　渡邊ふみ
澁谷春枝

○プール女學校
大亦一枝　菅野ふく
高橋百合子

○弘前女學校
岡本翠

○青山女學院
山本勝子　高村いく
星野妙子　深澤百合子　井戸谷米子
山室文代

○金城女學校
山口ぬい　梅本愛子
日野綾子

○共愛女學校
半田ふじ子　內山たゞ
黒田はる

○廣島女學校
滿村傘子

○女子美術學校
關操子

○東京女子高等師範學校
須田しげ代　小高つや

○川越高等女學校
內田エク

○三輪田高等女學校
和田うめ子

○山脇高等女學校
清水久子

○女子職業學校
中山けい

○仙臺高等女學校
横澤つぎ

○御茶水高等女學校
安井みよ

○個人出席者
池田みづほ　藤本ますゑ
名倉みち　金原千代　宮崎ます
金原たけ　石井滋世　木澤勝子
井上千歳　淺井ハル　山中洛子
大槻愛子　渡邊とらせ　門倉ふじ
大西絹子　ミセス、テーラー　志々目てる
柴田みち　井熊たみ　大塚きり子
藤島杜代　中村よね　和田靜子
渡邊與三郎　岩田善明　中村すゞ
瀬川すみ子　河野みつよ　河野文子
福井德三　福井春　小林市藏
黒田久㒵　野村みち　高木鋒子
築紫つる

（但し臨時聽講者をも含む）

○看護婦（三井慈善病院より）
菊野とりよ　横山きく

○委員及事務員
井深花子　星野愛子　小此木松子
小池實惠　松宮信子　ミス、マシユー
ミス、カフマン　ミス、アズグード　ミス、トリストラム
ミス、レーゲン　藤田貞子　長谷川喜多子
大谷久子　河口正子　伊藤菊子

●加藤高子姉の歸朝

二年前に恰度夏期修養會が終つて直ぐ米國に留學せられし同姉は滿二ケ年間彼地にありて、青年會に關する事共を視察研究され、又紐育市の女子青年會幹事養成所を目出度卒業せられ、去る八月十二日チ

ヤイナ號にて無事御歸朝になりました。九月よりは愈々神田の新會館に於て東京女子青年會幹事として御活動の筈であります、どうか同姉の御活動の上に祝福あらん事を祈るもので御座います。

●家庭製作品奬勵會旗の會

諸外國にある

Women's Exchangeにならひ我國にも今度金子子爵夫人を會長に瓜生男爵夫人を顧問として家庭製作品奬勵會と云ふものが出來ました先月其第一回の展覽會を三越呉服店に催しましたが非常な好結果を收めました、此會は今迄手を空しうして時間を徒費して居た婦人達がその閑暇を利用し種々意匠を凝して製作せし品物を此會に送つて賣れた場合にはその利益の幾分を取ると云ふ仕組みで、即ち一般婦人に家庭製作品の製作を奬勵をする目的で設けられた物で、會員組織ではありますが會費を徵集しませんので、其事業の諸機關に必要なる資金を得るために、今秋十一月の御大典に際し奉祝用として小國旗の徽章を作り、これを廣く賣り出して日本全國は勿論海外在留の同胞にも佩用を勸める事に決し、目下各地の有志を募て居ります當女子青年會もこの働に賛成し出來得丈御助けを致し度いと思ひ、右の小國旗のお取次をする事に致しました。此國旗は御大典の時のみならす、長く紀念として保存し得る樣に奇麗に織出してこしらへた物であります。若し青年會支部敎會其他の諸團體に於てこの擧に賛成され、個人々々に賣るために、多數まとめて御入用の方は本會に御申込次第御送附致します。本誌愛讀者、會員諸姉も御賛成あらん事を斷りて居ります。

會員及讀者各位へ御願

我が『女子青年界』は會員及讀者各位の御高庇により漸次發達いたし居る事は委員及關係者一同の感謝して措かない所であります。尙此際是非青年女子の間に充分行渡りますやう致したいと存じ努力して居りますから、御知合の方々へも御紹介下さるやう、會員及讀者各位の一層の御助けを得て、假令一二部にても御購讀の方の御勸誘を呉々も御願申上ます。

九月　日本基督敎女子青年會本部

見聞・經驗・所感

皆さんが平生に經驗されたこと、見聞されたこと、又御感じなされたこと、何なりとも成る簡潔に認めて御投稿下さい。私共は堂々たる大論文や大講談を聽くとも勝つて得難い敎訓や修養を其のうちに得られることがあらうと存じます。どうぞ少閑を惜まないで御寄稿下さるやうに會員及愛讀者諸氏に懇望いたします。

東京市牛込區田町三ノ十二

九月　日本基督敎女子青年會本部

編輯部

日本基督教女子青年會支部及寄宿舍其他位置

東京基督教女子青年會	東京市麹町區三番町四一
廣島女學校青年會	廣島市上流川町
同志社女學校青年會	京都市上京區今出川通
プール女學校青年會	大阪市西區川口町一二
ウヰルミナ女學校青年會	大阪市東區玉造
札幌女子青年會	札幌區北四條北星女學校內
宮城女學校青年會	仙臺市東三番町
クリスチアン女學校青年會	宇都宮市二條町七二
フエリス女學校青年會	横濱市山手町一七八
共立女學校青年會	横濱市山手町二一二
女子英學塾青年會	東京市麹町區五番町一六
女子學院青年會	東京市麹町區上二番町三三
青山女學院青年會	東京市青山南町七ノ一
女子傳道學校青年會	東京市小石川區指ケ谷町八四
神戸女學院青年會	神戸市山本通四丁目
金城女學校青年會	名古屋市東區白壁町四丁目
盛岡女子青年會	盛岡市内丸タピング方
徳島女子青年會	徳島市富田浦仲町ミスリツン方
横濱女子青年會	横濱市本町五一
搜眞女學校青年會	神奈川一本松
弘前女學校青年會	青森縣弘前市代官町
東洋英和女子學校青年會	東京市麻布鳥居坂八
梅花幼稚園保姆傳習所青年會	信州上田丸堀
第一寄宿舍	東京市牛込區納戸町四五
第二寄宿舍	東京小石川區水道町廿八(安藤坂)
好友園(幼稚園)	東京市小石川區金富町五七
旅行者の友事務所	東京市本郷湯島天神町一ノ廿四

National Committee

Headquarters. 12Tamachi Sanchome, Ushigome, Toky

Mrs. Hana Ibuka, Chairman
Dr. Kei Okami, Vice-Chairman
Miss Tami Mitani, Secretary
Dr. Tomo Inouye, Treasurer
Miss Michi Kawai,

Active Member World's Committee

Resident Members	Non-Resident Members
Miss Ume Tsuda	Madame Asa Hirooka, Osaka
Miss A. B. West	Mrs. Koito Saiki, Kyoto
Miss Uta Suzuki	Miss M. F. Denton, Kyoto
Miss Kita Hasegawa	Miss Michi Matsuda, Kyoto
Miss Sarah Ellis	Miss Yoshi Kajiro, Okayama
Miss Chiyo Yamada	Miss K. Tristram, Osaka
Mrs. E. W. Clement	Miss Susan Searle, Kobe

Secretaries

Miss Michi Kawai, National
Miss A. C. Macdonald, National,
Miss Ruth Ragan, National Office
Miss Margaret Matthew, General, Tokyo
Miss Mary Page, Associate, Tokyo
Miss Emm Kaufma, Associate, Tokyo
Miss Mary Baker, General, Yokohama

本誌定價

一部(郵共)	金七錢
一ケ年分	金七拾錢
海外	金拾壹錢
	金壹圓廿錢

廣告料

一頁	金六圓
半頁	金三圓五十錢
四分ノ一	金貳圓
一行	金貳拾錢

大正四年八月廿八日印刷納本
大正四年九月一日發行

發行所 東京市牛込區田町三丁目十二番地 日本基督教女子青年會
編輯兼發行人 東京市牛込區田町三丁目十二番地 河井道子
印刷人 東京市芝區櫻田和泉町七番地 前川吉次郎
印刷所 東京市芝區櫻田和泉町七番地 三成舍

THE YOUNG WOMEN OF JAPAN

(Joshi Seinen Kai)

Volume XII September, 1915 Number 8,9

The Summer Conference in Japan, held July 21–29, 1915, differed in several ways from the ones of former years. First and foremost, both Miss Kawai and Miss Macdonald, national secretaries, were absent in America, and the leadership of the conference was in the hands of more or less inexperienced people: but Miss Matsu Okonogi, of the Higher Normal School in Tokyo, as chairman of the summer conference committee; and Miss Ai Hoshino, of Miss Tsuda's English School, as leader of the conference; proved exceptionally capable, and they also had faithful helpers. The registration this year was much smaller than usual, which may be accounted for by the fact that in previous years the weather had been unbearably warm, and together with the crowded condition of the hotel, everybody uncomfortable, but this year the weather could not have been more delightful, and although the general registration was smaller, the total of those present from the beginning to the end of the conference was larger.

The program was unusually strong, with such speakers as Rev. Judo Imai of St. John's Episcopal College in Tokyo; Rev. Kanamori and Colonel Yamamuro of the Salvation Army; Dr. Somei Uzawa, M.P.; Rev. En Kashiwai, and others. The motto of the conference was found in Isaiah 40:31, "They that wait for Jehovah shall renew their strength; they shall mount up with wings as eagles; they shall run and not be weary; they shall walk, and not faint;" and Ephesians 6:10, "Be strong in the Lord, and in the strength of His might." The day began with Bible class study, except when there were sunrise prayer meetings at five-thirty. The main lecture came the hour before noon. The afternoons were usually free, and the girls went swimming or walking. The evening meetings were informal, given to the discussion of Association work or even only to delegation meetings.

Two interesting things were undertaken by the girls themselves this year. Last year one of the schools asked to have a meeting for the servants in the hotel. This year girls from various schools led several afternoon meetings for the servants. The sunset meetings of the conference have always been held in the garden back of the hotel, and men, women and children have gathered outside the fence to watch the proceedings. After one of these meetings, a kindergarten teacher called together a group of the children and taught them a song and told them Bible stories. After that every evening girls took turns in having a children's meeting, and from sixty to one hundred children were there. They also attended the sunset meetings immediately afterwards at their old post outside the fence. The sunrise and sunset meetings were also conducted entirely by the girls themselves.

One of the most interesting meetings was that given to reports from the various Associations. Sometimes the reports become tedious because there is so much repetition, so this year we limited the girls to three-minute written reports. Nineteen Associations out of twenty-three in Japan were represented at the conference, and of the fifty-seven minutes allotted to them they used fifty-five, and no two Associations repeated. The total attendance at the conference was 184, representing thirty-four schools, of which thirteen were government and private schools. Of the 143 regularly registered delegates eighteen were non-Christians, and these as well as the Christian girls seemed to be very deeply moved by the meetings.

大正四年八月廿八日印刷納本 大正四年九月一日發行 明治卅七年五月七日第三種郵便物認可